

八月三日

一四時出勤八ツ後退出堀一條云々之譯有之今日拙處の堀滞在

八月四日

一四時出勤八ツ後退出今晚中山次州脇坂の被出

八月五日

一四時出勤今日重役御用申來登殿脇坂の被罷出 御前の云々言上登州承知之趣云々實不堪殘懷今日終日御評議之 今夕泊番之

八月六日

泊明之八ツ時退出 大原様の御使相勤暮罷歸大原様御上洛日限 越上洛ニ付御登城一條此御方様御立日限等之儀 御前に言上堀夜前罷歸今日入來止宿山科止宿今晚中山の差越

八月七日

今日四時出勤四ツ後小松家物見よおひて登殿の議論ニ及今日八ツ後堀

堀小太郎處分ノ件

一條ニ付脇坂の出テ候筋ニ亦登殿の拙者附添之賦と 御沙汰也

一八後上御屋敷登殿所の差越候處（堅兵衛御前）西筑參居登州議論相變居又々及辯駁暮時分同伴脇坂の出張之處病氣よて登城無之御逢御斷之

一佐土原も御出之賦ニ候處前條通ニテ御取止明朝板倉の御出登殿拙ニモ同様之今夕引取

八月八日

今日早天の板倉へ出張之賦ニ候處西參リ亦々異論有之云々返答何分佐土原の寸時立寄板倉の御出を進メ其儘板倉の出公用人（〇〇）の逢拜謁願候處色々六ヶ敷申立候再三再應應答いさし候處佐土原引取之上御逢可相成旨返答ニ亦相待居候處已ニ御大鼓打直様登城相成候故先ツ引取候直様 御前へ形行申上亦登州同道退城之上板倉へ出候筋之七時分上御屋敷へ出懸候處登殿病氣之由岩山八郎太早馬ニ亦注進其儘引返シ小松家に立寄帶刀殿出張之處 御前へ相伺候處先ツ一人差越候様被 仰付

利通板倉閣老ニ會ス

候則飛の如ク西向に立寄御留主居附役西村喜作同伴板倉の出張候處夜五ツ時分面談相叶十分及演説候云々返答内分ニ聞置与之主意上手ニ會釋候一先引取候今夕中山に差越歸ル海江田奈良原參ル深更ニ及ビ談話

八月九日

四時出勤則昨夜之形行言上此上ハ表向御届相成ルト不成ト之境にて御決定奉伺候處十分此方之主意申解候上ハ聞拔キニ相成趣意を推サレ候場ニ無之先ツ此上ハ堀を夫成召置可然与之御沙汰云々之

一八後中山に立寄中山次州へも差越西の御用談海江田奈良原に差越夫の傳奏邸の御使相勤云々暮前山科同道兩國へ參り乘舟隅田川之月ニ棹シ風景微妙苦心中之鬱散ニ候汐留へ着山科相別れ中村へ上リ休息ニある四ツ過の比歸ル

藤井良節京ヨリ至ル

一近衛様諸大夫進藤式部權少輔藤井良節着之

八月十日

一出勤掛中山に立寄四ツ後傳奏邸の御使相勤候之尤今日御登城之筈承リ御之よめ替之御書持參之る處藤井も參之云々之譯ニ付早々歸邸待合セ之賦候處間違又々出懸候處ニ藤井中途にて行逢直様歸邸寸時御前に罷出罷歸リ山科も入來談合明朝參殿之筋ニ決ス

八月十一日

一早朝芝進藤之旅宿へ差越云々談合傳奏の罷出云々言上歸懸進藤に立寄歸邸中山に立寄出殿今夕泊番之今夕亦寸時進藤拙旅宿に入來

八月十二日

一泊明之八を退出  
一今日進藤御使ニ被參 御逢涼風軒へ控ニテ御馳走小松家中山次小生ニモ加席之

一今日

勅使登城

貳卷 (文久二年八月)

百七十六

勅使御登城云々之御都合山科暮時分參ル形行進藤の申入候處山科の面談ニ云々被託候

一 進藤夜入過退散

一 山科拙旅宿へ參り四時分歸ラル

一 京師飛脚差立本田の問合出ス

八月十三日

一 今朝進藤の差越云々四ツ後出勤泊番之

一 上様土佐様本多様の御餞別として御出夜入五時御歸殿泊

八月十四日

一 四時出勤八後退出

八月十五日

一 四時出勤八後退出

八月十六日

大原御濱御殿ニ遊

一 四時出勤八前山科御使ニ被參八後又 大原様御使相勤今日ハ 大原様濱御殿の御出山科同道あんきくと申茶店の差越夜入傳奏邸の罷出候處御歸殿候得共御逢不申上空敷罷歸候

八月拾七日

今日五前大原様の御使相勤九時歸出殿八後退出七ツ半比より谷士同道

中村屋へ差越兩人參夜入過罷歸ル

八月十八日

今日九時出勤泊番之

八月十九日

一 泊明之

一 今日八時御供揃ニ奉 三郎様市橋の御出越前も御出之由夜入過御歸殿

則 御前の形行拜承先々御都合宜敷難有退出仕舞方いさし候

八月二十日

久光公慶喜ヲ訪フ

貳卷 (文久二年八月)

百七十七

來島又兵衛來ル  
毛利定廣久光公ヲ  
訪フ

今日四時出勤九時大圓寺參詣

今朝來島又兵衛入來云々引合

一八ッ後松平長門守様御出

一今日仕舞方混雜之

八月廿一日

久光公江戸ヲ發ス

一今日六ッ半時御仕舞四時高輪御屋敷御機嫌克被遊御發駕候 十四丁許

品川 御小休 大佛前 釜屋半右衛門 壹里九丁

大森 御小休 山本休三郎 壹里九丁

川崎 御休 一里半

生麥 御立場 富士屋傳七 一里

神奈川 御立場 御本陣 石井源右衛門 一里九丁

右之通被遊御通行 神奈川御小休相成程の谷驛に暮時分被遊 御光着

候

生麥村ノ變

一夷人生麥村ニ御行列先キに騎馬ニ乘懸壹人切捨外者逃去候山神奈川邊別及騒動候今晚四ッ半比退出

一神奈川ニ高崎猪太郎土師吉兵衛へ夷人舉動探索相託置候今晚問合度

々相達夜明ケ高崎猪太郎參リ則出殿云々

八月廿二日

一七ッ半時程の谷 御立 二里九丁

戸塚 御立場 澤邊九郎右衛門 一里三十丁

藤澤 御立場 御本陣 蒔田源右衛門 二里

南郷 御小休 松屋清左衛門 一里拾丁

平塚 御休 二里廿六丁

梅澤 御小休 松屋作左衛門 二里

小田原 御泊リ

右之通諸所御休ニ夜入過被遊 御光着候

一 今日御供之今晚兒玉源五右衛門土師吉兵衛届として入來之  
 一 南郷御小休ニて京師本田問合達ス此内より參居候飛脚今晚三組差立返  
 答いたし置

八月廿三日

一七ツ半時分小田原 御立 二里

湯本 御立場 米屋紋右衛門 一里

畑 御小休 茗荷屋畑右衛門 一里八丁

箱根 御休 一里半

山中 御小休 宗 閑 寺 二十八丁

三ツ谷 御立場 松 雲 寺 一里半

三島 御小休 樋口太郎兵衛

沼津 御泊

右之通諸所御休等ニテ夜入時分被遊 御着候

久光公沼津ニ至ル

一 御國元々廿八日立之飛脚着税所喜三書狀達

一 高崎江戸に着形行云々則言上

八月廿四日沼津に一日御滞在

今晚藤井良節高崎子奈良原子參ル

八月廿五日

一七ツ半時沼津 御立 一里半

原 御小休 植木屋與右衛門 一里半

柏原 御立場 浮島屋和右衛門 一里半六丁

吉原 御休 一里二十丁

岩淵 御小休 ときと 彌 兵 衛 一里八丁

蒲原 御立場 御本亭平岡 休 兵 衛 二里

倉澤 御立場 一里拾二丁

興津 御泊

興津ニ至ル

右之通諸所御休ニ暮時分被遊 御光着候  
一京師ヨリ飛脚着本田問合來ル

八月廿六日

一七ツ半時 御立興津

一里二丁

江尻 御小休 御本亭寺尾與右衛門

一里廿丁

小吉田 御小休 稻葉源右衛門

二里餘

彌勒 御小休 龜屋五郎右衛門

三十丁程

九子 御休

二里九丁

岡部 御立場 御本亭内野覺兵衛

一里廿六丁

藤枝 御泊リ

右之通 御通行阿部川御都合克 御渡リ被爲在候事

一今晚京師ハ飛脚差立本田へ御用封仕出候事

八月二十七日

一御目覺六ツ時藤枝 御立 六ツ半時 壹里餘

三軒屋 御立場 岩崎屋太郎兵衛 一里餘

島田 御小休御本亭置鹽藤十郎 一里

金谷 御小休 佐野左次右衛門 一里廿四丁

日坂 御休 一里廿九丁

掛川 御泊

右之通御通行大井川御首尾克御渡七ツ過被遊 御光着候事

一今夕岸良七之丞法克太郎左衛門入來

八月廿八日

一御目覺六ツ時掛川六ツ半時 御立 一里二丁

原川 御立場 伊藤又右衛門 一里八丁

袋井 御立場御本亭田代四郎左衛門 一里半

見附 御休 二里

池田

平野太郎兵衛  
平川伊平治

二里八丁

濱松 御泊

久光公濱松ニ至ル

今日天龍川御都合克御渡七ツ時分 御光着被遊候事

一今日京師より飛脚着 陽明家御父子様を御内書被進候本田問合參ル

一山科を一封參ル

一今夕泊番之

八月廿九日

一七ツ半御目覺六ツ時濱松 御立 一里半

篠原 御立場 糺屋喜兵衛 一里半

舞坂 御小休御本亭宮崎傳左衛門 海上五十丁

新居 御休 一里廿六丁

白須賀 御立場御本亭大村庄右衛門 一里半

二川 御立場御本亭馬場彦十郎

吉田 御泊

右之通御通行新居御渡御都合克被爲濟七ツ過御機嫌克被遊 御光着候

一今日御供之

一今夕江戸に飛脚差立山科を一封差立

八月卅日

吉田 御立 六ツ時 一里拾六丁

伊奈村 御立場 加藤新助 一里廿六丁

赤坂 御休 一里九丁

寶藏寺 御立場 鈴木新助 一里

藤川 御立場 森川休左衛門 一里半

岡崎 御泊

右之通ニ於八時被遊 御光着候

一今日非番ニ於七ツ時分出立九ツ時着いたし候

閏八月朔日

定刻岡崎

二里

大濱

御小休

高井善兵衛

一里三拾丁

池鯉鮒

御休

一里拾六丁

前後

御立場

辰巳屋忠二郎

一里半

鳴海

御小休御本亭下郷良之助

一里半

宮

御泊

宮ニ至ル

七ツ時分 御着被遊候

一今日御供まゐ七ツ時着今晚山科入來

閏八月二日

佐屋川支ニゐ 御滞在

一今晚泊ニ付四ツ過より出勤

一藤井良節着ニゐ御着懸陽明家御參殿之儀云々ニ付立返リ候直様立被

仰付候

閏八月三日

一御目覺七ツ半宮六ツ時

御立

二里九丁

岩塚

御小休御本亭武藤平八郎

二里

神守

御小休同

猪飼文藏

一里半九丁

佐屋

御休

三里川御下リ

久光公桑名ニ至ル

桑名 御泊

右之通諸所御休ニゐ大鐘時分被遊 御光着候

一高崎奈良原森岡寺と入來

一今夕本田問合參ル

閏八月四日

一六ツ時挑灯御用意桑名

御立

二里八丁

富田

御立場

酒屋五郎兵衛

一里



四日市 御小休御本亭清水太郎兵衛 一里  
 追分 御立場 鍵屋長三郎 一里廿七丁  
 石薬師 御休 廿五丁  
 庄野 御立場御本亭浪田兵左衛門 二里  
 龜山 御立場御本亭樋口太郎兵衛 一里半  
 關 御泊

右之通諸所御休よて夜入過被遊 御光着候

一今晚本田へ問合出ス

閏八月五日

七ツ半時關 御立 二里  
 加太 御小休 坂 清次郎 壹里半八丁  
 拓植 御小休御本亭福池彦六 一里半  
 柄山村 御立場 一里半

久光公石部ニ至ル  
日光宮御通行

寺庄村 御休 一里八丁  
 三本柳村御小休 中西和助 一里半  
 田川 御立場 植木屋庄右衛門 一里半八丁  
 石部 御泊  
 右之通日光宮様御通行よ付御道筋相替了御通行相成夜入過五ツ時分  
 御着被爲在候

一今日御先番よ付本街道通行七ツ過後着今夕泊相勤候

閏八月六日

七ツ半御目覺六ツ時石部 御立 一里七丁  
 梅木村 御小休 大角彌右衛門 一里半  
 艸津 御休 二里六丁  
 鳥居川 御立場 鍵屋庄兵衛 一里半六丁  
 大津 御泊

右之通御通行今日八ッ過被遊 御安着候

一今般加藤十兵衛旅宿へ見舞有之候

一本田彌右衛門士も御用ニ付入來則同道御本陣に罷出中山に引合本田又々旅宿へ同伴九ッ時分被歸候

閏八月七日

一八ッ時御仕舞毎之通大津驛曉七ッ時御立 一里

追分 御小休 有川市郎兵衛 一里半

蹴上 御休 一里計

陽明殿

久光公京都著  
近衛家ヲ訪フ

右之通御小休ニ御旅裝之儘 陽明家へ御參殿御控席へ御通り無程於御書院 御父子様へ御對顔一應御引入ニ御議奏衆へ御對顔御用談被爲在候

一明後九日御用之儀被爲在候間 御參内有之候様議奏衆ヲ被爲蒙 御内

久光公錦町邸ニ入

勅候

一暮時分御退散錦町邸之様 御歸館被爲在候

一今日御道筋三條通寺町通今出川中立賣御門御入陽明家表御門御入被遊候御行列拜見之貴賤老若夥敷よふく御輿御通行被爲調候位ニ候殊ニ御所邊ハ輕キ官女ノ類ハ迄拜見ニ相見得御跡乘ニ候處實ニ恐多とも何とも言語ニ難盡夢中之心持ニ候

一今日三條通ニおひて駕籠訴いたし候者有之候

一御歸殿之節夜入候處御道筋ハ軒々へ行燈ヲ出し御馳走いたし候

一今夕出殿祝酒いたゞき候

閏八月八日

一今朝出殿(役所見聞)吉祥院小河彌右衛門其外段々見舞客有之候

一四時出勤四ッ後帶刀殿藤井共々陽明家參殿 御父子様御目見被 仰付

三郎様御滯京之義云々御沙汰有之候則七ッ過退出出殿今夕正親町三條

利通近衛公父子ニ  
關ス

様の御使として参殿云々申上候四時退殿中山の鳥渡立寄歸ル

閏八月九日

六ツ時中山大納言様の参殿云々言上夫の陽明家の御先番ニ参殿

一五ツ半時御供揃て御地廻御行列にて御参殿御控席へ御通り

一青蓮院宮様三條少將様も御参殿

一御父子様へ御對顔終る 宮様三條様御對顔被爲在候

一八ツ時於御控席御料理被下候

一申刻頃關白様御拜領之御直垂御召替被爲在御参 内御臺所御門を御

入奏者所御玄關を御上り御輿寄所へ御控御取次虫鹿織部正案内傳奏衆

坊城宰相の御逢又々御控所へ御引入直ニ虫鹿案内にて傳奏の引合セ傳

奏案内にて長橋局御縁坐敷の御着坐上段の 出御議奏三卿中山大納言

様正親町三條大納言様野々宮宰相様傳奏坊城大納言様御席詰ニ關東

形行御尋被遂言上議奏衆を被爲經 奏聞此間入又々御引出 被爲經 奏聞

久光公参内復命ス

久光公ニ褒勅アリ  
御劍一口ヲ賜ハル

候處

叡感不淺 思食候与之不容易被爲蒙 褒勅御劍一振中山様御取次御拜領

被遊於御控所御茶菓子御頂戴被爲在候申下刻又々陽明殿之様御退散御

控所へ御通り御湯漬御頂戴則 御父子様へ御對顔四ツ時錦御邸へ御歸

館被爲在候

一御臺所御門より内用人兩人近侍八人艸履取一人之外御供不相成候

一用人之場ニ小松家帶刀中山次右衛門近侍中山中左衛門拙者谷村小吉木

藤角太夫御供目附兩人奈良原喜左衛門海江田武次奥小姓相良量右衛門

近侍之場本田彌右衛門御履上ヶ吉井中助

一御太刀中山中左衛門持之御定差御腰物袋入ニ拙者持之

一御冠リ關白様御持合之御品御頂戴

一御履左大將様御持合之御品御頂戴

閏八月十日

利通久光公ニ隨ヒ  
御所ニ参ル

一 今日四時出勤泊也

閏八月拾壹日

利通公卿邸へ廻禮  
チ勤ム

一 六ツ半御目覺之御仕舞平日之通り八ツ後退出正親町三條大納言様中山大納言様野々宮宰相中將様三條少將様の御參内之御禮且又御土産品進上御使者相勤候暮過歸本田吉井入來

閏八月十二日

一 四ツ時出勤八ツ後退出八ツ後坊城大納言様の參内之御禮御使者相勤候一刻伊地知正治子入來今夕谷村小吉子の悔として差越

閏八月拾三日

一 今朝有馬九左衛門見舞として入來四時出勤今夕泊番之夜入過佐土原能勢(本邸在備)御用有之小松家の差越候尤岩下佐次右衛門吉井中助高崎猪太郎明日出府被 仰付今晚御用談として被參居候御用談相濟又々出殿

閏八月拾四日

一 泊明之

久光公青蓮院宮ヲ  
訪フ

一 御目覺六ツ半時御仕舞平日之通巳刻御供揃ニ有青蓮院宮様の御出被爲在候七ツ半御歸殿

一 今日吉井杯出立ニ付本田吉井入來云々談合

一 陽明殿を參殿御用申來一刻出殿云々御沙汰承知暮時分參殿則正親町三條様御目見被 仰付兩日中 三郎様議奏衆の御對顔云々言上大略御返事拜承引續 關白様御父子様御目見被 仰付候 三郎様の御秘策御獻呈相成候様云々格別之御 内勅被爲蒙拙者の御渡相成候則退出暫時出殿御寢後故歸宿

閏八月拾五日

一 四時出勤明日 陽明家の辰半刻御參殿被仰出 三條様御使者大塚儀八郎 中山家御使者相良内膳云々應接いゝし候

一 能勢次郎右衛門の御趣意書相渡候八ツ後退出七ツ後本田能勢同道本

利通近衛家ニ至ル  
久光公へノ内勅拜  
戴

國寺見物として差越候歸懸鰻食ニ差越五ツ時分歸本田藤井立寄らば談話及深更候

閏八月拾六日

- 一 陽明家御參殿ニ付御先番として五ツ時分參殿いふし候御側役中山次州奥御小姓相良御奥ニ候
- 一 辰半刻頃御參殿御控所へ御通ニ候
- 一 正親町三條様御參殿より御用よて御目見被 仰付云々承知仕候則言上一中山野々宮様議奏三卿御參殿
- 一 御父子様ニ御對顔終る三卿御對顔被爲在候八ツ時分より御用談被爲濟三卿 御參内暫時御引入又々 御父子様御居間へ御通リ數刻御用談七ツ半比議奏衆御退散 御參殿暫時 三郎様御控所へ御引入又々議奏三卿御對顔數時夜入過御控所へ御引入又々 御父子様御對顔五ツ半御退散

議奏三卿參内  
久光公ト會議

又八月十七日

段々客來有之候

一 四時出勤今日泊番之五ツ半御寢

又八月十八日

一 六ツ時御目覺之八ツ後退出彌右衛門士入來談合書面相認

又八月十九日

一 今朝段々客來藤井も入來四時出勤書面差上候八後退出中山家正親町家御使相勤候暮歸宿小河入來

又八月廿日

一 今朝四時出勤今日九ツ時御供揃ニ候 近衛様川原御殿櫻木町御殿に被爲入候櫻木御殿へ御先番として差越候七ツ後御歸殿被爲在候大鐘時分歸邸今晚加藤波江野參

又八月廿一日

久光公近衛公父子  
ト寛話

一 今日五ツ半御供揃ニテ 近衛様は 御參殿御控所へ御着坐  
 一 議奏三卿坊城宰相様も御出 御對顔被爲在候暫時御控所に御引入  
 大原様ニも御出 御對顔被爲在候  
 一 大原様を御召よる御目見いたし云々  
 一 議奏衆御歸殿之後 御休息所ニテ 御父子様は 御對顔 御寛話被爲  
 在候

利通ニ懐紙ヲ賜フ

一 小生中山次右衛門御休息所に被召 御手から御懷紙拜領被 仰付候誠  
 ニ冥加至極奉存候  
 一 夜五ツ時御控所に御引入御夜膳被下候  
 一 四ツ時御歸殿  
 一 今日御先番ニテ候御跡を退出暫時出殿  
 又八月廿二日  
 一 九時出勤泊之明日御立故混雜之四ツ過御寢

又八月廿三日

久光公歸國ノ途ニ  
就ク  
利通隨從

一 六ツ半 御目覺四ツ半時分錦御屋敷 御立一昨日方々雨ふりつゝき今  
 朝までもふと候處御立前々晴上リ晴天相成候四條邊御行列拜見夥敷伏  
 見街道拜見人引續候八ツ時伏見御屋敷は 御機嫌克 御着被遊候  
 連日雨よる御供支之

又八月廿四日

一 今日六ツ時御立被 仰出候得共川支ニテ九ツ時迄御延引相成候九ツ時  
 分川明キ之御届有之 御立暮時分 (原書欠文) 御着六ツ半大坂御屋敷へ  
 御着被遊候寅屋へ旅宿いたし候

閏八月廿五日雨

一 今日住吉御參詣被仰出置候得共大雨ニテ御取止相成候四ツ時出勤八ツ  
 後退出 晚景谷村士入來今晚本田出立ニ付一刻見舞候

閏八月廿六日雨

一今日四時出勤八ツ後退出昇天丸明日出帆ニ付御荷物差出候段々客來有之今夕岸良入來

閏八月廿七日晴

一四時出勤泊之

閏八月廿八日晴

一七ツ時 御目覺八ツ半時御立七ツ半兵庫へ被遊 御光着候

一今夕荷物永平丸に積入暮過本田彌子着ニホ

京師 御獻米云々之趣別上御都合よて則同道出殿形行言上仕候

閏八月廿九日

久光公ノ一行兵庫ヨリ乗船

一六ツ時永平丸へ被遊 御乗船六ツ半出帆相成候今晚多度津手前へ汐懸りいさし候順風ニホ神速如射まのしフユノ瀬戸夜分通舟不調故御舟之

九月朔日

一未明出帆順風宜敷

九月二日

九月三日

九月四日

阿久根ニ着ス

今日九ツ時阿久根に 御機嫌克被遊 御着岸則御假屋に御上陸被爲在候

一周防殿御出迎として御出張相成候

一川上式部殿東郷長左衛門も同斷

九月五日

一七ツ時 御立

阿久根

一里拾五丁廿四間

伏森

御野立

一里半拾六丁

西方

御休

一里半七丁

柘平

御立場

一里

新田宮

一里

向田 御泊

右之通御通行より七ツ時被遊 御光着候

一新田宮に御參謁被爲在御供いたし候

九月六日晴

一七ツ半時 御立

向田

一里半四丁四拾間

木場 御水茶屋

一里拾三丁五十三間

五反田 御水茶屋

一里一丁拾三間

湊 御假屋 御休

一里拾一丁拾三間

妙見嶽 御立場

一里九丁五十八間

苗代川 御假屋御泊

右之通諸所御休等ニハ八ツ時分被遊 御光着候

一今日ハ御先ニ踏越九ツ前着いたし七ツ時分御假屋退出いたし候今晚ハ石原正殿迎として入來五ツ過石原直州着ニハ今晚ハ止宿被致候

九月七日晴

一苗代川七ツ時 御立

一里半拾五丁拾八間

五本松 御水茶屋

一里六丁卅六間

横井 御假屋御休

一里半八丁四拾九間

水上 御茶屋御小休

半里拾二丁拾七間

鹿兒島

右之通 御休等ニハ午刻目出度被遊 御着城候七ツ時二九より退出今晚類中客來有之退散後喜三子入來七ツ時歸ラル

九月八日

今朝段々客來有之四時出勤掛 菅廟參詣願望成就ニ付百拜祈念 二九に出勤明日御一門方御三役二九に被召候ニ付云々一封奉ル歸退掛 南

貳卷 (文久二年九月)

二百三

久光公鹿兒島ニ着ス

利通菅公廟及ヒ南林寺ニ詣テ



林寺參詣百拜丹誠ヲ凝シ願解仕ル墓參イタシ歸ル今夕外出不致

九月九日晴

久光公恩賜ノ御劍  
及褒勅ヲ披露セラ

四前出勤今日御一門方御三役御目見被 仰付御拜領之 御劍拜見被  
仰付御側役以下一統にも拜見被 仰付候

一拜見終る 大守様 三郎様御列坐御書取御一門方并御三役の御下ケ被  
遊候

一帯刀殿の御刀大小御拵相添御手自拜領被 仰付候尤今度於

京師關東 盡力骨折候段御賞譽之 御沙汰も被爲在候

久光公手カラ御縁  
頭及ビ鐔ヲ賜フ

一中山拙者の御縁頭鐔右同斷之御譯ニ御手自拜領被 仰付

一御脇差ニ亦も被下度 思食候得共差當リ御手元の御在合無之今日之間

ニ御合セ被遊度与之御趣意ニ御在合之品被下候之事

一表向御用御達ニ亦拜領被 仰付思食候得共 御參内之節御願御拜領之

例ニからいせられ候思召之事

福昌寺參詣

右二ヶ條谷村小吉の御沙汰之趣奉承知候事

右之御趣意よて拜領被 仰付實以武門之冥加不過之奉存只々涕泣感伏  
言語之及所ニ在ら候

一七ツ過退出中山山谷村三原<sup>(文清)</sup>同伴福昌寺

順聖院様 御廟の參詣御願解百拜奉祈念候

一今夕喜三石原直子入來 御神酒いたゞき候

九月拾日

一出勤掛山田氏<sup>(本助)</sup>皆吉氏<sup>(五郎左衛門)</sup>の差越出勤いたし候八ツ後退出晚景の今夕喜三子

入來及談話候

九月十一日晴

一四時出勤八後退出今夕小松家に中山同伴差越候九ツ時退散

九月拾二日晴

一四時出勤八後退出今夕鈴木士<sup>(字左衛門)</sup>入來九時被歸候

九月十三日晴

關東ノ變革ヲ聞ク

- 一 風邪氣不宜今日ノ不致出勤
- 一 今日内田仲之助着之由ニ而鎌田入來於關東變革之次第承候
- 一 諸大名參勤三年一度百日滯府之令發し候由
- 一 妻子凡る國元引取之事
- 一 國元出立之大名ニ亦も相達次第中途ノ引返之事
- 一 服制之事上下等相減候事
- 一 大守様ニ御奉書到來之御事
- 一 右之趣承候誠ニ斷然たる變革絶言語 三郎公之御功業彌相顯れ候難有次第之

九月十四日

一 今日も風邪不宜不致出勤八ツ後稅喜子入來

九月十五日

- 一 今朝内田仲之助士入來段々關東之形行承候
- 一 今日迄も不致出勤候

九月拾六日雨

一 今日ノ出勤泊番相勤候

九月十七日雨

一 御目覺六ツ半時八後退出今夕喜三子入來町田直五郎殿入來

九月十八日

- 一 四時出勤八後退出
- 一 出勤前御本丸へ出勤
- 一 今夕石原直川（川原直川）魯山崎（崎）長野八郎兵衛入來
- 一 退出懸小松家ニ差越

九月十九日

一 出勤掛小松家ニ差越出勤八後退出退出掛牧野氏樵山氏早崎氏岸良氏

差越暮時分歸

九月廿日

一四前奈良喜八子入來出勤掛南林寺  
順聖院様御廟に參詣出勤八後退出

九月廿一日

一四時出勤今日泊番之 三郎様御本丸へ被爲入七ツ過々御供代リ合五ツ  
過御歸殿

今日御日待よる夜明よて候

九月廿二日

一九ツ時依 御沙汰中山に差越 御旨趣相達候今日出立也八ツ後上之圖  
邊諸所差越海江田氏に今晚差越奈良原兄弟參ル

九月廿三日

一四時南林寺參詣出勤

利通ニ小柄ト筭ヲ  
賜フ

一御小柄 御かふあい

右今般 三郎様御供ニ於關東段々骨折候譯御沙汰ニ御手自拜領  
被御村候實ニ分外之義只々不奉堪恐懼候

九月廿四日

一四時出勤八後退出退出掛喜三子の用事ニ於吉祥院へ一會大鐘時分引取  
今夕早崎氏へ差越候

九月廿五日晴

一四時出勤八ヨリ退出木藤士奈良原士同道楠公(伊藤石田ニ在リ)社參詣暮歸ル今夕喜志良  
入來

九月廿六日

一四ツ時出勤八ヨリ退出草牟田方墓參等いたし候今夕鈴木に差越岸も入來  
九月廿七日

一四後出勤今日泊也

貳卷 (文久二年九月)

九月廿八日

一八ツヨリ退出

九月廿九日

一四時出勤

明日大藏殿依御差圖北郷浪江殿御取次ニ御用致承知候

九月晦日

四前出殿

一御用御取次見習

利通御用取次見習  
ト爲ル

大久保一藏

右當御役ニ右之通被 仰付御用部屋ニ相勤御用透ニ夫御小納戸方  
も致心添様被 仰付候

九月

大藏

右之通北郷浪江殿以御取次被 仰付誠ニ恐懼々々當惑ニ次第之實ニ難

有義ハ無申まで此上ハ身命を奉し盡し奉らむん詮方無之候

一八ツ後々上方禮廻いたし七ツ後歸宿類客段々有之

十月朔日

一四ツ時出勤

一御本丸二丸中山隔日相勤候様被 仰付候得共今日ハ御本丸ニ相勤八ツ

二九ニ罷出七ツ時分禮廻いたし候

十月二日

一四時出勤御本丸ニ出勤寸時二九にも出勤七ツ時分退出荒田方禮廻  
いたし暮時分歸家

十月三日

一四時出勤二九ニ七ツ分出勤退出

一御用取扱初めいたし候

仰出御家老坐ニ罷出候

貳卷 (文久二年十月)

十月四日

一四時出勤八後退出

十月五日

一四時出勤八後退出

十月六日

一四時出勤八後退出

十月七日

一四時出勤

十月八日

一四時出勤八後退出郡山氏(二分)の差越

十月九日

一四時出勤八後退出城山の差越今夕九時歸

二百十二

# 大久保利通日記

## 第三卷

文久三年癸亥

九月十二日晴

久光公鹿兒島發利  
通隨フ

今日巳刻 (久光公) 三郎様御機嫌克 御發駕被遊候

一御立前 御子様方御目見御供人數に被 仰付候

一御一門御目見被 仰付 (久光公) 大守様御書院迄御見送り

鹿兒島 御立 半里十二丁餘

水上御屋敷 壹里五丁餘

横井 御休 壹里六丁餘

五本松 御水茶屋 半里十一丁餘

苗代川 御泊

右之通諸所御休等ニ御都合克暮前 御着

一惣御供中方御祝義申上候

一毎之通高麗踊被爲在 御覽候

高麗踊御覽

參卷 (文久三年九月)

九月十三日晴

一六ツ半時 御立

苗代川

妙見嶽 御立場

市來港 御休

木場 御茶屋

向田 御泊

右之通諸所御休等ニル七ツ時分被遊 御光着候

一今日之隈之城地頭代より御先番相勤七ツ半時打立八ツ時分向田に着

一新納嘉藤二殿着公義御船鯉魚丸鶴崎に着船之由順動丸も御借舟相調候

由

一永山清右衛門大坂に被差立候

一藤井良節の問合來ル

九月十四日

向田六ツ時 御立

柘平 御水茶屋

西方 御休

阿久根 御立場

阿久根 御泊

右之通諸所御休等ニル七ツ時分 御光着

一今日御戸土迄御先立

一西方迄御供西方の御先ニ踏越

一旅宿の伊地知正治得能良介所役白濱勘兵衛全助右衛門參ル

一正治義今晚出水迄被差越

一白濱等鶴崎迄出サル

一京都の飛脚通行

一野村壯七長崎(宮)着

九月十五日晴

阿久根五ツ時 御立 一里六丁餘

柴山 御野立 一里四丁餘

野田地頭假屋 御休 一里餘

めん之平 御水茶屋 一里九丁餘

出水 御泊

久光公出水着

右之通諸所御休等より七ツ時分被遊 御光着候

不時召集ヲ試ム

一御着直ニ早鐘打勢揃 御覽被遊候神速人數駈集御満足 思召候左之通

御沙汰書

當所之義境目之事ニ兼て定置候相圖に應じ神速駈集神妙之至 御

満足 思召候當時天下之形勢不穩候ニ付時世汲受抽忠勤守關之任ニ

堪候様 御沙汰候事

郷士六十人ヲ隨フ

上様御物見の御覽人數揃之御届いたし御棧敷下の島津主殿と相廣め一同御暇

一當所の郷士六拾人日奈久迄被召連候段被 仰付三拾人は今日より水俣迄差越跡三拾人明日水俣迄被召列當所の御暇明日水俣之人數日奈久迄被召列候

一野田地頭代に御假屋迄御先相勤當所の御供

一今夕海江田房村(宮)入來

九月十六日陰

出水七ツ時 御立 一里半餘

米津 御茶屋 一里餘

笹原 御水茶屋 二里

水俣 御休 一里半

貫村 御小休 宮原敬之助 一里

參卷 (文久三年九月)



佐敷ニ至ル

貫峙 御野立 一里  
 湯ノ浦 御立場 宮島善助 一里  
 佐敷 御泊

右之通諸所御休等ニ暮時分被遊 御光着候

一今日御供

一今夕海江田士横山正太郎入來

一當所馬廻リ大矢野仙左衛門入來

九月十七日晴

佐敷六ツ時御挑灯御用意御立 二十六丁

佐敷峙 御野立 壹里半計

田之浦 御小休 藤崎彌二郎 二十六丁計

赤松峙 御野立 壹里餘

二見村 御立場 百姓壽助 壹里四丁

日奈久 御休 遠山彌二兵衛 二里  
 高田村 御小休 二里  
 八代 御泊

右之通御通行ニ暮前被遊 御光着候

一十四日差出候二階堂蔀初六拾人日奈久八代に致着候

一出水人數日奈久に御暇被下候

一今日日奈久迄御先番御晝後御供

一日奈久薩摩屋松村傳右衛門御出入三人扶持被 仰付候

一森岡清左衛門熊本に御使旅宿にくひて相達

一藤井氏(助市)に書狀相達母公御無事之吉左右安心に候

九月十八日

六ツ時八ツ代 御立 二里

種子山村 小田平之進 御小休 二里

參卷 (文久三年九月)

小川 御休

壹里

豐福村 三角屋清藏

壹里

古保里 御立場 百姓文右衛門 二里

川尻 御泊

右之通御通行七ツ過被遊 御光着候

一今日終日非番御先番泊相勤

一葛城彦一當所（長州）に着長州之模様大略相分候

一海江田入來奈良原明日（長門）の御先踏越之義相達候平田平六久留米御使一條

二付

一鶴崎の公義順通丸着伊十院吉左衛門着

一御國元の飛脚被差立候

九月十九日六ツ時

川尻 御立

二里

熊本入口 御休

一里

熊本出口 御立場 久本寺 半里十三丁餘

三之宮 御野立 二里

松木町 御休 三島大七 壹里餘

大津 御泊

右之通諸所御休等ニ而七ツ時被遊 御光着候

一今日終日御供

一久木山泰藏當所（伊之丞）に着鶴崎筋之模様相分候

一葛城彦一昨夜着當所（原ノマ）の被差立候

一今夕久木山葛城入來

一長崎の飛脚着竹下（伊之丞）の問合來ル

一藝州長州境小瀬川

一三田尻關の三拾里位

一正親町御迎紀州江州奥平和州都合九拾六人

九月廿日

大津六ツ半 御立 壹里拾六丁程

堀ヶ谷 御野立 二十丁

峠茶屋 御野立 壹里

的石 御小休 御茶屋 二里

内ノ牧 御泊

右之通御休等より七ツ時被遊 御光着候

一今夕久木山泰藏京の差立候付暫時入來帶刀殿傳内(小舎)の問合出ス

九月廿一日

内ノ牧 御立 壹里拾丁餘

塩塚 御野立 壹里餘

坂梨 御休 二拾丁餘

戸之上 御野立 壹里半程

笹 御野立 壹里半

三本松 御立場 松本周平 壹里

(原ノ)村 御立場 光照寺 三十丁

久住 御泊

右之通御休等より七ツ時分被遊 御光着候

一今日御先番(在置)にて八ツ過右所に着いたし候

一足輕竹下角一永田源之進届申出候

一木村嘉次郎外兩人届申出候明朝嵯峨關迄差越候様達置候 左之通

一長州此節山口ト申處ニ新城御築立相成 御兩殿様共御滞城之由此處四

里四方ノ地面ニ候由

一三田尻より宮市は一里宮市ノ山口は四里山口ハ萩ハ七里又山口ハ小栗

ハ參里小栗ハ宮市ハ四里

- 一宮市小栗其外惣五里四面位ニ新ニ御番所御出來
- 一公義蒸汽船ニ御下リ之御目附(使中根之充)中根市五郎上下七八人小栗ニ滞在之處何者共不相知七月十九日内六人及切害二人ハ逃去候由
- 一三田尻御茶屋ニ雲上人七人御滞館被爲在候
- 一長州專ラ自國之警衛ニ外々ハ押出相成候体ハ無之
- 一奇兵隊組之内私共問屋伊勢屋小四郎ト申者御懇意ニ小倉ト及合戰候得去一時勝利可有之候得共内輪崩レニ相成候去異船打拂の邪魔ニ相成事故宜敷無之ト嘶有之由
- 一八月十八日比中山侍從様大和之内天川ト申處ハ浪士多勢御召列御代官始役人八人も切捨ニ相成御引籠リニ相成候由
- 一正親町様當月初筑前黒崎迄御渡被遊候處九月十一日俄ニ三田尻ハ急ニ御渡ニ相成申候風説ニ御大名方ハ打方被 仰付御人數黒崎ハ御差向ニ相成候得共御引取後ニ相成候由

- 一 下ノ關方ハ軍艦惣大將トして國司信濃今ニ出張候由
- 一 奇兵隊組々頭宮城彦助与申人少之 一件ニ付先砲隊組与爭論起リ彦助及切腹其後も和合無御坐由ニ奇兵隊組三百人位當月五日山口ニ御引取ニ相成外之御組ニ七八百人下關ハ交代相成候由
- 一 右之節公義蒸汽船ハ奇兵隊ト乗船ニ三田尻ハ廻船于今滞舟之由

九月十五日

清太郎  
庄藏

右駕中ニ記置

九月廿二日

- 久住御立 六ツ時 二里餘
- 上四口村 御立場 一里餘
- 堤 御小休 伊東太次郎 一里
- 小本田原 御野立 一里計

今市 御休 御茶屋 一里拾丁餘  
 黒都甲 御野立 一里拾丁餘  
 右之通諸所御休等ふる七ツ過被遊 御光着候

一今日終日御供之

一今夕江夏士入來

一伊平治殿入來

九月廿三日雨

野津原五ツ時 御立

二里餘

八幡田 御立場

妙瑞寺

一里半餘

牧村 御立場

武田堅節

一里十六丁

鶴崎 御泊

右之通諸所御休ニる七ツ過被遊 御光着候

一今日御先番

久光公鶴崎着

一今日俄ニ當所に被遊御逗留候

一白濱勘兵衛全助右衛門旅宿に參ル鶴崎迄差出ス

一今夕兒玉雄之介御召船一條ニ付參ル

九月廿四日陰

一御召船一條ニ付嵯峨關迄踏越被 仰付六ツ半打立中途迄差越候處得能

良介に行逢亦々鶴崎に立歸候

一明日迄御滞在被 仰出候

一今夕竹下伊之丞入來

一白濱助右衛門全勘兵衛外ニ兩人六月四日夕下ノ關邊に被差出候金拾兩

ツ、兩白濱に八兩ツ、外兩人に被下候

一中村市之助も入來

九月廿五日晴

一六ツ時打立嵯峨關に差越九ツ時着則鯉魚門順通に乘込見分鯉魚門 御

利通佐賀關ニ先發  
ヲ命ゼラル

召船ニ相究候

一 今夕旅宿の新納嘉藤二木藤角太夫入來

一 久留米松崎清藏見舞有之

一 木村喜二郎外兩人參ル是ヨリ御暇被下候金八兩ツ、三人に被下得能良

介の渡云々

九月廿六日晴風立

一 昨日の佐賀關に滞在いたし居候

一 三郎様今日鶴崎御立ニお八ッ過當所に被遊 御着候今日去當所に 御

滞在明日御乗船被 仰出候

一 今朝角太夫嘉藤二同伴鯉魚門に乘付候

一 御着後諸人荷物積入方いたし候

一 今夕平治殿入來

九月廿七日晴

久光公佐賀關ニ至

召船ニ相究候

一 今夕旅宿の新納嘉藤二木藤角太夫入來

一 久留米松崎清藏見舞有之

一 木村喜二郎外兩人參ル是ヨリ御暇被下候金八兩ツ、三人に被下得能良

介の渡云々

九月廿六日晴風立

一 昨日の佐賀關に滞在いたし居候

一 三郎様今日鶴崎御立ニお八ッ過當所に被遊 御着候今日去當所に 御

滞在明日御乗船被 仰出候

一 今朝角太夫嘉藤二同伴鯉魚門に乘付候

一 御着後諸人荷物積入方いたし候

一 今夕平治殿入來

九月廿七日晴

一 本日御先番御本陣に一時罷出鯉魚門に乘付候四ッ時被遊 御乗船候八  
ッ後七ッ時御出帆相成候今夕八ッ時分御手洗に着ニ碇泊いたし候

九月廿八日陰

一 早天御手洗港出帆相成候處多度津近邊手島ト申處に八過御着舟當所に  
碇泊相成候

九月廿九日

一 今日六ッ時御出帆相成候處七ッ時兵庫に御機嫌克被遊御着船候御供舟  
も致皆着無此上御都合ニ候

一 帶刀殿當所に御待迎ニ候

一 京師事情も別段不相分候

一 飛脚被差立候求馬殿(島津)に一封宿元(高橋)に同様五ッ時退出

一 今夕旅宿(高橋)に高猪子入來

十月朔日晴

久光公兵庫着

兵庫四ツ時 御立

壹里半

寺内

御立場 魚屋伊兵衛 一里

住吉

御小休 吉田善右衛門 二里餘

西之宮

右之通御休等ニハ八ツ過被遊 御着候

一今日終日御供ニハ候當所ハ黒田久木山等參居候尙明日御道筋探索被

仰付候

吉井高崎來ル

一今夕吉井高崎當所ハ參長郎浪士七人之義ニ付伺ニ參候今夕泊之

十月二日

一西之宮六ツ半 御立

五拾丁

武庫川

御立場 茶屋 安兵衛 二里余

瀬川

御休 二里余

郡山

御立場 梶 善右衛門 二里

芥川 御泊

右之通御休等ニテ七ツ過被遊 御着候

十月三日

六ツ時提灯御用意 御立

芥川

(モトノマシ)

久光公着京二本松ノ邸ニ入ル

右之通諸所御休等ニハ御機嫌克七ツ過二本松御屋敷ハ被遊 御光着頓

と安心初ハ帯を解候

一今日八ツ時分ハ御先番ニ付云々相勤候實ニ配慮無申計事之

一御着之飛脚被差立候

一今日夜入退出いたし候

十月四日

今朝段々客來有之三部ハ出勤夜入ニ退出今日吉井中子奈良原子高崎子

谷村<sup>(愛之助)</sup>子入來

十月五日

三部<sup>方</sup>出勤今日御當地に相勤居候守衛人數詰役々々於 御前御酒頂戴御沙汰書御達相成候暮時分退出今夕小松家に罷出候段々集會議論有之候

十月六日雨

三部<sup>方</sup>出勤

從駕ノ士ニ酒ヲ賜フ

一今日御供惣人數御酒頂戴被 仰付候物主島津頼母川上源十郎吉利群吉

二階堂部於 御前御酒頂戴并ニ 御沙汰有之 御沙汰書相渡候

一惣守衛人數於 御前被下筋候得共雨天ニ於 御前被下候筋相心得於物主旅宿いたゞき候様御達相成候

一七ツ後退出稅所<sup>(喜三左衛門)</sup>子入來

一四ツ時出勤

一高崎左太郎<sup>(近衛)</sup>に 左大將公<sup>(近衛)</sup> 三郎様<sup>(近衛)</sup>に存意御尋之義有之候云々御答相成候

一一橋公<sup>(橋本)</sup>越春嶽公 御召御決定相成候由明日 御沙汰相成候筈

一尾州阿州御暇相成候

一八ツ後<sup>方</sup>神樂岡<sup>(川上)</sup>に地面見分として帶刀殿式部殿平治同伴差越候吉田領之内御屋敷見合ニ相成候

一夕景歸今晚暫時喜三子高崎子入來

十月八日晴

(以下ナシ)



原本美濃横帳紙數二十八枚 縱四寸八分 横六寸八分

日記

元治二年乙丑  
正月廿五日

藤原利濟通

日記ノ表紙ニ濟ノ字ヲ削シテ通ト爲セルニ因リ其ノ初メテ利通ト稱セシハ慶應元年中  
ナリシヲ知ルベク蓋シ島津忠濟公ノ名ヲ僱リテ改諱セシモノト思ハル

利通鹿兒島ヲ發ス

廿五日乘船吉井稅所同行

正月廿六日

拂曉小蝶丸出帆同夜脇元ニ碇泊

正月廿七日

未明出帆同日入ッ過長崎着船肥前屋ニ投宿汾陽等（次郎有傳門）引合御用相濟

正月廿八日

曉出帆夜五ッ時博多ニ着則上陸

正月廿九日

早天筑前帆足彌二兵衛旅宿ニ入來諸事引合

同人嘶

一長州内亂細事不分十四日吉川盛物（盛物）出馬

十五日長門出馬（毛利實也）之由

參卷（慶應元年正月）

（慶應元年）  
正月

黒田慶賢ニ謁ス

今日筑前御内使者相勤幸輔同道(黒田慶賢)下野守様拜謁被 仰付候

一今晚夜ニ入博多(黒田慶賢)ノ歸宿同藩今中作兵衛伊丹真一郎旅宿(黒田慶賢)ノ入來寺石變名  
大山彦太郎ニモ入來五ツ過久留米(黒田慶賢)ノ發足

正月三十日

久留米ニ赴ク

早天久藩(黒田慶賢)ノ着松崎誠藏同役戸田鎌二郎入來拜謁ノ義申入候處今井榮(黒田慶賢)ノ  
引合吳候様承リ八ツ後今井入來御直書相渡 御趣意云々申込候則登城  
形行言上可致与之事

一今日中決答無之今晚今井并松崎氏旅宿(黒田慶賢)ノ入來及寛話候今井頗人物(黒田慶賢)ノ

二月朔日陰

久留米候ヨリ挨拶アリ

今日四ツ後今井旅宿(黒田慶賢)ノ入來御返詞(久光)ニ趣 大隅守様(久光)ノ別(久光)御懇篤被爲仰  
遣候趣深忝被思召御即答被成度候へ共段々内情も有之全外々(久光)にも被爲  
對候迄之御處置(久光)ニも無之何レ篤与御勘考之上此より御返詞可被仰遣幾  
重ニも態与御使者被差立候義深御挨拶申入候様 御沙汰(久光)ニ由委曲御答

承知いたし候

一不破左衛門松崎誠藏久徳與二右衛門等入來段々預響應候七ツ時歸路ニ  
赴候今晚八ツ時博多(黒田慶賢)ノ歸着

二日雨

利通博多ヲ發ス吉井ハ留マル

五卿折合ニ付幸輔當所(黒田慶賢)ノ滯在小生稅所乘船四ツ時出帆七ツ半田之浦(黒田慶賢)ノ  
着碇船

一自博多河野兵十郎歸國ニ付御用封仕出候

三日

田之浦出帆御手洗迄碇船

四日

御手洗出帆夜兵庫(黒田慶賢)ノ九時着

五日小雨

晚兵庫出帆大坂川尻(黒田慶賢)ノ五ツ前着大坂御邸(黒田慶賢)ノ四ツ時着八ツ後御留主居見

大坂ニ至ル

聞役等書店等の差越晩木樓の差越

六日小雨

川登リ夜九時伏見に着

七日

利通着京

伏見五ツ時出立八ツ前二本松御邸に着爲御届小松家に罷出段々及御用  
談候備後殿(鳥津左衛門)に罷出寶町旅宿に歸今晚小大夫公岩下氏(佐次右衛門)内田等入來

八日晴

四時大夫に立寄出殿御用段々有之岩下氏御役替ニ付祝三樹(三本木)に八ツ後々  
差越候今晚四ツ時歸

九日晴

四時大夫入來同伴

朝彦親王ニ謁ス

尹宮參(明彦親王)殿奉命之一條言上之處隨分能御都合ニ有尤御草稿入 御覽可  
成之御趣意も表向御建白不被差出全

朝廷之 御趣意ヲ以斷然 御沙汰相成候得之天下人心も歸嚮いたし

朝威ニも相掛候事故是非其筋ヲ以奉願候様申付られ候段若亦差出候方

宜舗与之事ニ候ハ、何方に成共思召ヲ伺御差圖次第取計候様申付候趣

巨細申上候處尤ニ 御思召候此義之兎角從

朝廷 御沙汰不相成候之不相濟義ニ候御直書被差出有無之御即答ハ

難被遊候 内府公(近衛忠房)に御談合可被遊候間其内委曲申上候様与之御事ニ有

先隨分之御都合之 内府公ニハ小生共相扣候内御參殿相成御談合之由

退出懸梅亭に大夫爲祝差越候

十日

一今日之早天々大夫岩下君内田等入來終日不出

十一日晴

昨日 内府公大德寺就 御參詣大夫同道今日參殿

御兩御所様拜謁被 仰付候參府一條言上いたし候處 御趣意至極御尤

近衛卿父子ニ謁ス

兩閣老上京ノ内情

ニ被 思召何れ此一條を御沙汰不相成候へハ不相濟就るを全ク  
朝廷之御趣意ヲ以被 仰出候方可然依る御草稿丈明日二條公(實世)ハ入 御  
覽委曲言上致置候様 御沙汰ニ別る克御都合之事ニ候  
一兩閣老上京之次第大略左之通 内府公ハ相伺候  
一此内伯耆守橋邸(本庄宗秀)ハ參殿一切上京之趣意不申上此度之義ハ依 御召上京  
与申譯ニ無之且 大樹公御使与申譯ニも無之趣意を豊後守一緒ニ可申  
上与之事候故橋公(橋本)例之謀略ニ酒ヲ勸メラレ酩酊ノ上終ニ白狀いたし  
候由第一當時ニハ

朝權不相立其譯ハ諸藩切ニ上京種々入説いたし候を輕卒ニ  
朝命相發シ夫故  
朝權も薄ク隨る幕威も衰え候間凡る諸藩ヲ拂盡シ幕手ヲ以奉護いたし  
候賦ニ大造人數も引列上京いたし候一体ハ  
朝廷之御利口ハ不宜譯ニハ棚上之神ニ類シ容易ニ

朝廷ハ棚ノ上ノ神  
ノ如シ

朝命かと不發社御當然ニ可有之  
一旦亦

朝廷ヲ奉始公卿方御一同薄祿之御事故此節莫大之金銀持參何方より共  
是ヲ投ケ候得右等之事件ハ大方やり付候心組与申候由

一橋慶喜歸府ノ件

一橋公ハ御前も兎角御歸府不相成難相濟大樹公も種々御心配之義多萬端  
御談合被成度自ラ 大樹公

朝廷ハ御願立相成候間 御沙汰次第早々御歸府被成度ト申上候由御答  
ニ 大樹公御心配之ケ條ハ何等ニ候や神奈川鎖港一條りと御返シノ處  
いや神奈川一條ハ既ニ英人切害候者ヲ英人面前ニおひて死刑ニ處し候  
間是ハ彼も別る悦服償金も請取ニ不及ト申都合ニ何モ懸念ニ不及申  
ト申上左様なら何等之事件りと御押詰候處常野浪士一條ニ被召候  
旨申上其義ニおひて御斷申上度常野之事ハ實兄(徳川慶喜)ヲ差置自分色々申儀  
ハ難相濟候間 台命トハ共御斷申上ル賦ト御答ニ候由

一傳奏カ 大樹御機嫌御伺ニ御出相成度無左候ハ此方カ難罷出与申候  
由惣體戊午時分ノ幕ニ復シ候暴意ト相見得實ニ大變之次第ニ候

武田耕雲齋等刑死 一常野浪士ハ越前敦賀カ土藏ニ押込去ル四日ニ武田始廿七人盡刎首七日  
迄ニ七百人凡ハ死刑ニ處シ殺盡いたし候由其取扱苛刻ヲ究衣服ヲ剝  
取赤身ニなし束飯ニテ獸類ノ會釋ニ候由是ハ田沼取計ニ（其時）橋公邊ハ  
全ク談合ニ不及候由實ニ聞ニ不堪次第之是ヲ以幕滅亡之表ト被察候

三月廿二日

利通京都出發

京出立

夜伏見川下ヲ

三月廿三日

曉大坂着 廿六日迄滞在

同四時乗船

三月廿七日

曉出帆夕景夕島カ碇泊

三月廿八日

曉出帆夜四前三机湊カ碇泊

三月廿九日

曉出帆四ツ時佐賀關カ碇泊石炭積入いたし候

四月朔日

利通細島着諏訪内  
田等ニ會フ

曉出帆七時細島カ着小蝶丸も入津ニ（其時）諏訪家内田等取會いたし候

同 二日

曉出帆夜四ツ時分内之浦カ着舟

同 三日

未明出帆暮前之濱着舟

利通鹿兒島着

和歌

御手洗の湊にて

ふさめして夢のゆくへをたとるまに月も朧みまに霞ミルるの朧

初花

立初し霞も今はみよし乃は朧のよやひと成に々るの朧

宇治にもものして千鳥の鳴々せり

いとワのぬるよもまらば宇治河のあみさちのへり千鳥鳴くこ

あ々のあした雪ふり々れり

明るる朝日の山乃雲間より散るふも朧のさるのあけ雪

何となく春の々しきおもしろし

立のへり宇治の川浪寒々れと春の雪よも埋れさりけ祭

女のさきを行を見て

春風にみたれて見ゆる乙女子のもすそも花にまのふ比か南

あらし山よものして

この春もあらしの山のも朧陰ようあるへしとち思ひかきや  
ことしのミさく朧花の心地してくるもまらばうのれ々る哉  
あらし山咲よやひさる花陰よきふをさのまると鶯の鳴

人々花むけの歌よみておくらせ々せり

大の川早瀬の水も立のへりまをと花と夜と朧んとやする

夜春雨といふ事を

さひしさの朧も望し夜半のうたねよみたせてのよふ春の雨の粒  
語らひしともいのへりて春の夜乃雨のさあしきものよてあり々る

花漸盛といふ事を

よしの山木の間よみえて咲も朧の雲にいつのさちまのふ朧

寄花祝といふ事をよみて重春君の移住の御祝ひよ奉は

咲初し御園の朧よ香をうへて千とせの春に君をすむ哉

山家春興といふ事を

けふもまよ夕となりて鶯の聲さへあむ春の山里

故郷花

いにしへの御代の盛を春ことにあふきてそ見る志賀の花園  
春ならぬ御代ともえらて故郷によろふもあはれ山さくらあはれ

山吹

さくらも程なをきてのちによしの河も流をとめさる岸の山吹  
風ふあいろやうつるとみるまでに咲そろひさる山吹のそ歌  
都をさちなるに

散花に契やおあんな散とてもまよこん春に咲ぬと思へり

山の端にきよはともよし春霞ををといめん關とよにちれ

折にふせさる

はなの香いたもとにうとく成ぬともひとのこころのよほのさらめや

をめとしを思へは社あれ君にふふころにあらぬわををそまを

加茂河の柳を見て

さなきよかなしきものを賀も河の雨にあすみし夕月の影

題しらす

鶯のなくねにさすか青柳の根さしそかりそみたをさる境  
あら髪のワかれる駒の諸手綱引とめなるも人のまことあ  
あそさるとあふとふたつの上にしもふむへき戀の道は有なり

よと河舟中月をみて

散花に都をたちてよと河の月になあれてあへるよひあ歌  
棹さして行くく見れば九重の都の空に月霞をかり  
月影よあまをさりてよと河の片み遠くも千鳥鳴え

よと河の柳を見て

月影にしをきて見ゆるよと河の柳の思ひしる人やされ



難波ニて

花の香乃袖に乃こりて都路のまゝ遠らぬ心地社を

松間花といふ事を

えら雲のかゝはとみしに松の枝に咲るをしふるさくらを

杜新樹

きのふまで花にまひし衣手は杜をみとりと成にたるを  
しのひ手のまのふの杜の郭公はか葉のいろに鳴もあらぬ

難波をさちなる

故郷にゐへらんものを梓弓何にひるきてきかうかるら

難波江の霞を覚えて行雁のゆくへお取しきわかこゝろを

難波江の沖津えら波立かへるをさしやそての名残取らる

こき出てゐへるみやこの名残よりたち社まされ袖のえら波

難波江の霞のおくのやのくくとあきゆく空の限を成々

夢さにもみんとおもひし難波江のあきゆく春の明方の空

嵐山にて

この春もみんと契しひありても取さへこゝろ有世々

廿七日いよの國太島といへる湊よとまりて

いよ路取るたしまの沖よよるかみのおとそるを社友となりぬ

よもまゐら夢も結むぬとまゐねのまくらにまけく雨さへそふる

廿八日三机湊にとまりて

いく山をさしてさるよの夢なれのみやこ故郷ゆく雨えら波

廿九日佐賀の關にとまりたるに春もそや名残おれぬ

筑紫取る佐賀の關守こゝろあらぬ春の行衛をまはしとめ

一東國筋田作不宜凶荒之由

一江戸寺社奉行門前自縊之者有之書置有之由趣意ハ夷人交易より如此ニ

至リ迎も道路ニ立こと不能自縊いたし候尤長州御進發も是々して起り候爾后屹度御處置御改相成度云々  
 一日本橋の兩人ノ子ヲ水中ニ投シ自身も入水いたし候由同様書置有しと  
 一參州邊も百姓一揆を起し候由

丑五月廿一日晴

利通鹿兒島發

今日七ツ時過比發足いたし客來多水上迄茶屋迄見立之客も多し伊集院  
 の四時分着一泊いたし候

一野村宗七大山彦助長崎を歸府旅宿の見舞有之候

發足之折

今はとて出を歸さざる旅衣ぬれぬとあり此見取ミ之哉

伊集院に泊りて

故郷のわつかひと夜をるさつれと夢取らすしてみよしも取し

廿二日晴

今朝早天發足夜五ツ時阿久根に着いたし候

一得能彦左衛門殿旅宿の見舞當所一泊

一白濱勘兵衛熊本探索被 仰付相達候

三島彌兵衛ニ會フ

一西方ニおひて三島彌兵衛の行逢當月九日京都出立之由段々模様承候

廿三日後雨

四時阿久根出船之處雨降出し天艸牛深に碇泊

廿四日少雨

四時出帆肥後八代に夜入過着船沙不宜九時上陸今晚止宿

廿五日陰雨

早朝ヨリ出立夜白通行

廿六日

廿七日

今七時黒崎に着

郭公のなくを聞て

いく里あるをさて來ぬをと郭公の耳らぬ聲に々ふも眠く之  
なれもまた旅ねの床やうあるらん空にみされてかく郭公

旅曉のこゝろを

鳴れこる遠山里の鳥の音を聞つゝ今朝も立出に々架

よ半のねさめに

夢路といかしのねらぬ草枕さめてまさしき故郷のやま

述懐非一といふことを

くれ竹のわか世のうへをかそふをいうをしまふしのまゝかゝるを

不言戀といふこと哉

くれ竹の世にことの葉の甲斐あらぬそやくもひとにいはましものを

かゝるにふかたいろ能る岩つゝしいそぬ思ひをひとはまらそや

被妨戀

逢みまとのミしものを玉章の道さへ今の絶ぬとすらむ

久あさの月にあらねとわか戀のくものまれまをまちやむたらむ

同廿八日晴

今朝六ツ半過る比乗船いたし四ツ時出帆順風宜敷元山崎迄着船いたし

候處夜半を東風烈敷今晚滞船

同廿九日雨

今朝益東風烈敷逆モ出帆も出來兼田之浦之様引返し候九ツ時分田之浦

は着上陸いたし候風雨甚し

閏五月朔日陰

今朝順風直リ當所六ツ半出帆今日も二十七八里走リ室濟（同）与申所は滞船

同二日陰

早朝出帆上之關二三里過安まゝ島と申所に滯泊東風に雨烈敷今晚は止り候

同三日雨陰

今朝迄も雨烈敷候得共九ツ時西風に直り出帆いたし候處今晚鼻クツ迄参り滯泊

同四日晴

夜前も天氣直リ今朝久々振快晴相成順風宜敷雁くひの瀬戸迄参り行惡敷碇泊四過も又々出帆牛窓邊にて夜明候

夏月

さも社いなつの霜とやいふへ々をふけゆく空の月のすゝしさ月影のまゝしき夏の宵々々をせのミ絲をやあらしぬるるる

若竹

ことしより千代の陰をや契ら舞えけりあひなるやとのわら竹

和歌

いつ乃まに陰さをやとに成にけ舞月にいさはるまとのわら竹

竹風夜涼

くれ竹の林にそよ風之音に夕まゝしく成になるる取竹のはのなびくあさりのすゝしき宵くゝる露のやとる取るら舞

曉水鶏

有明の月を見よとる柴の戸をとくも水鶏のおとつをに々舞我門乃小田の朝霧淺からいたく水鶏もあらさゑましを

庭橘薫袖

五月雨に朽なんとまは袖の上にあや取くよふ軒のさちも取い糸あてにねやの戸あくる袖の上にも取さちも奪のよふ夜半か南人の香乃れこそし袖と思ひしりも取たち花乃よふふ之々舞

閏五月五日晴

天氣宜舗追手ニ亦四ツ時分迄之間室津前迄参り候へ共少々かまニ亦瑤

明のね候

同日 六日

大坂ニ至ル

大坂着

上京之義六ヶ敷中三日滞在

同日 九日

今日大坂出帆陸行ニ着伏見ニ着内田仲之助税所吉井等入來爲迎被參候

同日 十日晴

四ツ時打立八時着京

同日 十一日晴

今日内田氏爲祝丸山(關方)ニ參ル歸懸万亭ニ立寄歸 内府公參殿

同日 十二日晴

四ツ後正三卿(正親町三條實元)ニ參殿八ツ後吉得税三樹(吉井)(得能)(馬場)ニ行歸懸東寺ニ差越

一五月十二日

利通着京

久我岩倉諸公子近習ヲ命ゼラル

久我様 岩倉様 伏原様 堀川様 千種様

右子息衆御近習ニ被仰付候 内府公杯全御存知不被爲在追テ御廻達有之御驚駭被成候由

一十一日方 高辻様 西四辻様

右御内之者四人ツ、會津之手ヲ蹈入召捕候由尤有志之者共候段承候

一十三日 有栖川様

右同斷蹈入召捕トいたし候處逃去候由

右儲ニ虚實不相分候

老中本庄宗秀着京 一松平伯州十日方着京着懸會ニ立寄候由委事分兼候

十三日晴

今日御邸ニ引移候今晚得能税所竹下吉井等入來

十四日

十七日方

朝議被爲在候由幕府趣意不相分候得共姫路迄進發被相止浪花に滞在長御所置裁決いたし候様御達之處に御治定相成居候由

尹宮ニ謁ス

○尹宮に相伺候處御處置振之義至當を被爲得候處專要与之御趣意ニ候

廿日方

一會桑參 内ニ付

朝議被爲在三候を就上洛異説ニ御動搖無之様且小細之過失御責無之可成 御沙汰不被爲在若御沙汰相成候義ハ三藩に御相談之上被 仰出度

將軍參内

廿二日 大樹參

内一會桑を 御沙汰不被爲在候様与之事再三再應申上候由併於

朝廷ニ此内御治定相成居候ニ付

勅書ト 御沙汰書被相渡度与之御事候得共閣老之次第左ト御沙汰候得

之右に廻り候様之時機故若氣受損シ候得之必不都合可相成与段々申上

候義ニ亦程克

(以下ナシ)

思不言戀

みかせ河下ゆくみ竹のうちもいてまこゝろにのみも戀をさるる取 (内田) 政風

結句戀やわたらんにても

一さひは打つてゝみんとそゝりにたゆたひなかゑとしそ經にける (廣兼) 廣兼

ある人の歌に

いかにして打も出むと大舟のたゆたひなからとしそ經にける

おとくさのそ取のみめてゝ口なし乃いはぬ思ひをしる人やなき (若下) 方平

いろあそる我くろ髪は思ふ事いはぬ涙の流るかり々察 (高橋) 忠秋

思ふ事打出のそまゐあふさかのせきのあ取にありてふものを (高橋) 正風

えりら免やみぬまゐくれの岩こまけいはぬ思ひに亂れ且ふとも (段所) あつ子

古への歌のやうにていとくめてたく候也

わかおもひいはての杜にいのりつゝ人よえらるゝ時を社まで (木下) 清生

いつまてりかくて思ひをいはし水いはて心を碎こそまれ (吉井) 友春

結句くたくなるらんにても

おもひのみはもどく／＼ていふつらにいはて過行月日歌るゐか  
うちあきてと参ん時まつ我むねの思ひむろともいふへありなり  
打出んことはかくまでかたよ世にやましくも思ひ初てなるゐな

利通  
長秋  
時村

松下納涼

大の河入江のま竹の陰かくの水にも秋のゐよのさらまし  
住よしのま竹の木間にまとゐしてあけすれくさあせつる哉  
あきちかく成よけらしも昨日より参ふのすしきま竹の下陰  
さしのほる月も梢にあらされて夕すししたま竹の下陰

あつ子

忠秋

清生

利通

上句遠見の氣味あるやうに

いとちみのひしきに／＼たるま竹のせぬる／＼のかりにましありけり

長秋

うち片参に袂ましく成に々参月まみよしの松の下風

政風

加茂河の堤のまつの下陰も夕日さすまもすしかり参り

廣兼

實景松樹いゝまへらん

さゝ波を吹わたりつゝゐら崎乃まつにやと参る風のましさ

友春

一二の句今少し欬ま波の上をまさりて駈としていゝ侍らん

住の江のまつの下陰に立よれいづつの濱風ましありけり

方平

木陰か

かく蟬の涙を露にさたさて秋まつあけのましくもある

時村

たくみにきこえ侍れと實景いゝ侍らん

まゝみふね々ふも片参ゐん大の河衛ゐふちのまつの下陰

正風

初句品おとれるやうにや

扁舟暮歸

波の上のものと思ひし釣舟もくるれいへはあしのやのさと 忠秋  
あしやゐた夕涼しきうら風に吹きてゐへる蟹の釣舟 廣兼  
夕々ふり幽にまゆるすまのうらのとまやをさしてゐへる釣舟 利通  
心なきあぶ子まらも夕月乃光をのせてゐへりなるな 方平  
橋立乃まつの木間を歸る夕日乃浦乃蟹の釣舟 清生  
夕汐に能きの多しきやゐるら森磯つたひしてゐへる釣舟 あつ子  
ゆふつくひ沈果たる波間よりあらそれ初てゐへるつりふね 正風  
なには女あし火たくまてくれ初つ沖の一葉も今ゐへるらん 時村  
入相のかねのひききのゐるゐにも見えかくまつゐへる釣ふね 友春  
くれぬとて歸るをふまの友も取しいゐに寂しま磯邊取るらん 長秋

桃岡

六月月次會

水風涼

ひかし山木の間の月をさそひきてましく包さる賀もの川風  
消るる夜をさるの影もみされつゝたまねをワさる風のすしき  
水上に秋や立ら舞大の河入江をわたるゐ勢のましき

當坐

晚夏雨

のき葉もるしつくの音にみゆる哉秋もと取りの夕立乃雨  
軒ちゐく秋立ぬら舞こゝ地してもりくるあめも淋しゐり々

點取 兼題

池蓮

ものいそゝこゝへやまら舞處女子乃まゐさのいけのそ取蓮の香  
いけの面にさる蓮の花見れいゐるこゝろさへ濁らさり々

顯戀



とくも世にあらざればたるわか戀のしのひもあへぬ誠取らる  
まのひつゝ結ひしものを戀艸のいつしるい後に顯れに々

浦鶴

よる浪のさざきの上に聞ゆ之長居の浦のあしは侍の聲

大君の千代をまらへて和の浦のあしまにうさふふ侍のゆたけさ

水無月十五六日比月くもりなる夜は室町なるたひやとりにて

乙女子琴をまらるるにほとなく月をれりり々

大空にことのまらるやひくら雲もやふれて出る月の影

六月卅日難波橋よまにまかりて

難波江乃夕のまにまきしてくを行か侍のおしくも有る影

船中

夢中戀といふことを

たのみつゝきみもや今宵寝つらぬむまふまことはたあまこと歌る

折にふれて

露ふるき袖の上よして月乃を影とかりに々るるな

都早秋

雲の上に今朝遙にも立ぬらぬおとをりある秋のはけりせ

月前萩

萩の葉の音さやにもてる月のころ乃うこくとし先あるら

八月八日山口利雄本田親雄井上長秋を會してよめる

兼題

華洛月

陰もな御代の光もみゆるる粒大内るまのあきの夜の月

秋のよのいつくあれと九重の都の月をみるへり々

當坐

幽栖月

住甲斐のある世取るゝち柴の戸に宵くゝゝよふ秋のよの月  
秋たてゝひるまをまひさへてる月乃光たゝくもす舞こゝろの歌

掃衣

いつくまでゝおもひをやりて誰ゝ妻の秋のよふかくこゝろも宮内院

原本美濃横帳紙敷六枚 縦四寸八分 横六寸八分

慶應元乙丑九月

自記

大久保利通

利通福井ニ至リ松  
平慶永ニ謁ス

九月廿四日

一晝後京都出立同廿七日晝越前福井に着中根に一封遣候處直様村田巳三郎入來云々論判則夜登城いたし候様御案内有之則罷出候處 (松平慶永) 大藏大輔様拜謁被仰付候來ル朔日御上坂 大樹公御機嫌御伺之名目ニ不關老の御質問之上御盡力若不請付候ハ、其上御時宜ニ御趣意御決シ

九月廿九日

利通歸京

一夜半福井出立同三日京着

慶喜下坂

一橋廿六日方下坂之命有之直様下坂之處枚方ニ御用濟ニ下坂ニ不  
及旨從大坂申來居候由乍然下坂阿閣の對面之處既ニ阿閣松前兩人ニ不  
兵庫開港私ニ差免候段承知ニ尤松猶於城中一橋の

阿部松前兩閣老ヲ  
處分シ慶喜再ビ上  
京

勅許之上ちらてハ不可然旨議論相立町奉行井上主水正十日之期日を定  
め右條約取返し候由兩閣出勤差扣候様一橋相達廿九日の一橋上京之  
由

十月二日

一 參 内延引

十月三日

一 尾張玄同二條家の參殿 大樹公が征夷大將軍辭表差出候其趣戊午以來

精々盡力仕候得共不肖之私不堪其任一々

勅命を奉し候義相叶不申候間御免被 仰付慶喜民部大輔(德川慶喜)に被 仰付度

慶喜義ハ天下之形勢ニも通シ人心も歸向いたし候故其任ニ當リ可申与

之趣且玄同口上之趣去一橋ハ嫌疑モ有之宜鋪無之与之趣口上ニ而 殿

下ハ申上候由一通ハ異船一條ニ而當今之形行ニ而ハ字内之形勢相變シ

開港ならてハ宜敷無之旨詳細之め是非開港

勅許相成度与之趣之由右之口上ニ而大意承リ全文拜見不致候

三日

一 一會桑急ニ下坂一ハ伏見迄然處 大樹公今朝大坂 御發途伏見一泊ニ

將軍歸東中止

而東歸与申事ニ而右御差止御上洛御進めニ候由

十月四日

一 内府公に參殿之處 二條公御書參了今朝一橋乗切リニ而歸京今未明

大樹伏見着一會面會今日二條城に着之處ニ治定仕候付而御安心御届申

上ル与之御趣ニ御坐候依而今日御參ハ酉刻ニ可被成与之趣暮時分ハ御

一同御參一會桑小笠原等之(長行)

一 今晚徹夜之御評議之

今夜半 内府公ハ周旋方可罷出与之事ニ而藤井兄弟御所に罷出候處幕

府ハ申立之趣既ニ七日迄之期日も相迫候間今晚中御決答被下度異人申

立之次第ハ第一是迄之條約ヲ改而

勅許之條約ニ仕度与之趣ニ付何を願意通不被 仰付候而ハ兵端を開ク

与申張候間其通被 許度左候へハ兵庫開港之義ハ如何様共申聞可仕無

左候得と終ニ焦土与可罷成第一一橋ハ頻リニ暴威ヲ以申張候由賢候御

開港ノ評議

召來會之上不拔之國是御定御決議可相成段々御議論相成候得共言上通

勅許不相成候得ハ寸歩モ退キ不申与申上中々微力之

朝廷ニ亦御踏答六ヶ敷 内府公ニも必死之御たまりニ亦御盡力被爲在

候へ共

勅使之義も不被行終ニ三港條約之

勅許相成候由ニ御坐候

十月十日

一大樹公被爲蒙

慶喜政務輔翼

御懇命御請被仰上候得共不容易御時節ニ付 一橋様御政務補翼之儀

被 仰出十分ニ助力有之候様被 仰出候事

一同十二日一橋中納言正<sup>(兼方)</sup>二位大納言<sup>(兼方)</sup>御推任

御同意被 仰出

十月十一日

防長之處置今一應見込付可相伺事

同十二日夜

御所<sup>ハ</sup>一橋殿<sup>ニ</sup>

車寄<sup>ハ</sup>昇降劔持參於廊下休息之事

從二位大納言 宣下之事

同日

白川松前兩守護職所司代<sup>ハ</sup>御預御取消之事

交易條約之儀ニ付大諸侯御呼出長征濟候上ニ相成候事

十月十二日町飛脚被差立候事

木藤市助<sup>ハ</sup>堀市來<sup>ニ</sup>之一封頼遣候事

一十月十八日黒木直左衛門便ヨリ伊左<sup>(伊左衛門左衛門)</sup>表傳<sup>(兼方)</sup>ハ一封遣候事

慶喜ノ官位昇叙

大久保利通日記

第四卷

參卷 (慶應元年十月)

二百七十二

原本美濃横帳 紙數百二十六枚 縦二寸五分 横六寸一分 厚八分

甲寅秋改

# 萬覺

利通

本書ニ甲寅ト記セルハ丙寅ノ誤ナリ

暴風雨洪水アリ

八月七日

夜半暴風雨市中諸所家吹倒死人三十餘人桂川筋淀川筋暴漲近來希有ノ大風洪水之由可謂天變

同日

慶喜參内御劍ヲ賜

一橋中納言參内 御劍拜領但朝廷ニ振有之名刀之由也

同十一日

慶喜西下ノ期ヲ延

一橋來ル十二日西下發足之筈候處俄ニ延引相成桑名早天ニ下坂トカ子

征長諸軍私ニ解散

細玄於小倉小笠原閣老(長持)肥之長岡監物(長持)屢及議論同藩惣引取相成諸藩出張人數も同様ニ閣老一人ニ無致方長崎(長持)出張船(長持)華城(長持)參候(長持)んと之噂尤板倉乗切ニ昨朝上京

肥後 宮川小源太

右伏見大山彦八面會云々

肥宮川小源太長岡監物より相合上京（京九郎）淺井井ノ口の一橋桑會之説ニ隨從不及條理ニ付而周旋いふし候様申越候由

大里戰爭ノ風聞

一七月廿七日於小倉戰爭平戸藩浦熊澤咄ニ御坐候次第ハ熊本兵大里ヲ守居地雷仕懸相待候處長兵千許上陸及砲戰右ノ虛ニ乘し幕熊本ノ蒸艦三艘關地ニ向乗出シ砲發候處關地も手強打出シ三艘共痛損二艘去下之方ニ引取一艘去上ニ乗出シ佐賀之關に碇泊右艦に乘付居候者咄ニ長之蒸艦も一艦ハ打沈メ候様ニ見留候長兵熊本兵ト戰ニ及居候付他分（多分）ハ地雷ニ長兵死亡候半ト

一小倉藤田如助与申者咄ハ先月廿八日戰爭ニ而大里に熊本勢陣取候處長兵船ヨリ寄懸ケ大合戰勝負ハ不相分九州ノ諸家之人數ハ悉解兵相成候趣迄ハ大坂留主居ハ一封遣候との咄ニ而勝負ケハ不存与之由どふやら答出來兼タル様子

八月十四日

富田狀之内

一江戸表御普代衆一橋公（一橋）ハ御奉公得不仕候与結黨候企も御坐候哉ニ内評有之由

柳川藩家老立花駿介 堀 鎌藏 戸川登郎

小倉戰爭ノ情報

一八月十四日右柳藩堀鎌藏入來小倉之事情左之通承候

一先月廿八日戰ハ相違無之由乍併肥藩接戰ハ無覺束候全體同人も小倉の出屢長岡監物も面會合議之上小閣老（二橋實光）及議論別而被及困究候形之由固より出兵いふし候も戰ハ不接合ニ而候由

一同人義奉主命重役同伴上京 殿下一橋（二橋實光）にも出候由 殿下之處ハ既ニ 朝命違背付一橋に御委任被成候間今更無致方ニ付尙宜盡力いふし候様御沙汰候由ハ既ニ 朝命ヲ奉し候故無致方ト申御事ニ候由



家茂將軍薨去ノコト聞エ諸藩解兵

四卷 (慶應二年八月)

二百七十六

一同晦日 (新嘉坡) 大樹御他界之事相聞得其名トシテ肥藩始メ其外一同解兵

相成小閣老ハ蒸艦ニ有長崎に廻船同所幕船ニテ上坂之賦

一翌朔日早天ハ彦島之大砲聲ヲ相圖ニ大里ハ長兵押出シ小倉人數可

也ニ相防候内横矢ニ有打タレ小倉勢大敗北自ラ放火シ落城武家市

中盡ク焼失

小倉ハ妙見山トカ云田舎へ落去之由

八月十三日中條左衛門督 (島原王) 山階宮に參殿 大樹公喪ヲ發シ解兵之儀御

盡力奉願候由尤板倉其説ヲ以大ニ盡力いゝし候由

同日不時御參 内別段御評議不被爲在 殿下ハ小倉之形行云々御咄被

爲在候由

八月十六日

市橋板倉參 内書面差上候由其趣長防之義是迄度々 勅諭ニも相成既

ニ御暇參 内且御劍迄も拜領則發足可仕候處段々諸藩より申出趣も有

慶喜板倉勝靜ヲ隨へ參内

征長ノ爲メ四下ヲ辭シ且解兵ヲ請フ

之不圖も九州之諸軍盡ク解兵相成候由相聞得此ニ至テハ迎も微力ニ及

兼候間御免被 仰付一應解兵被 仰渡度尤 大樹ニも段々病氣大切相

成候段申越若事切也相成候ハ、喪ヲ發シ喪中解兵与御達相成候様与之

大意之趣ニ有候由然處

殿下尹宮(前嘉應王)などの處別ハ案外之御様子ニ有候様之譯ヲ以テケ様之存慮ニ

相成候やと御不審之體ニ有候由乍併別ニ御評議も不被爲在言上通与申

事ニ相成候

但何を諸藩ヲ招呼篤与公評ヲ盡シ至當之處ヲ施度与之事候由小笠原

上坂いゝし段々申出趣も有之与之事も有之由

右

内府公(近衛忠房)之御説

一一橋參 内國事掛 小御所に御出席

主上 出御従一橋公言上仕候趣長防之儀ニ付言上仕候趣も有之今更申

慶喜奏聞ノ大意

四卷 (慶應二年八月)

二百七十七

上候義甚以奉恐入候得共九州之形行云々之次第ニ亦逆も只今之次第ニ  
 亦諸藩一同徳川ヲ見捨候勢ニ相成中々成算無覺東候間 大樹ノ喪ヲ  
 發シ其名ヲ以テ解兵相成候様奉願候然上天下之牧伯ヲ被召公評ヲ以可  
 討不可討之論ヲ定御處置被爲在度与之大意之趣ニ亦言上之由  
 殿下御沙汰ニ以之外成次第ニ亦先日迄之段々言上之趣も有之亦今日變  
 シテ論ヲ立候事不得其意如何之趣意ニ候ヤト 御返詞被爲在候處御尤  
 之御義ニ奉存恐入たる次第ニ御坐候乍併假令して申上候へハ先夜之暴  
 風も同前ニ亦前日迄之無事之處一夜よして艸木ヲ倒し小路ヲ荒し候も  
 同様なる譯よて先達迄ハ先可討見留も有之候得共九州之變ヲ以俄ニ見  
 留も變し候譯ニ御坐候仍亦此上ハ於幕府も段々失體も有之候付凡亦御  
 斷申上御委任筋をも返上仕諸侯と共に天下ノ心ヲ心として變革いふし  
 申度左候亦將軍職之義ニ何く迄も御斷申上可然其任ニ堪候者被命度与  
 之儀も申上終言上通被 聞召通ト申事ニ相成候由

藝州口戰爭ノ情報

但橋之所存薩熊本肥前因備宇和島藝州阿州土佐九藩之賦ニ候  
 一去ル五日六日七日藝州合戦初長兵寡兵ヲ出及敗走候由幕議是より至ル  
 所臺場築造寸歩も不退賦ニ候處七日夜風雨ニ乘シ夜討ヲ懸候處幕兵不  
 意ヲ打レ大敗北終ニ五日市迄引取本ニ通取返サレ長兵廿日市迄押寄候  
 由

但藝州ハ人數出シかゝら傍觀いふし井伊榊原及懸合候處初より戰  
 之賦ニ無之自國警衛之爲ニ候段返詞よて大ニ立腹いふし候由

八月八日長防御首途ニ付御暇參 内之砌被 仰出候由

一橋中納言

大樹先達亦已來所勞之處追々差重テ候ニ付危篤之節ニ相續之義奉命ニ  
 趣相受又防長之義至急ニ付爲名代近々出陣之事大儀ニ  
 思食候將軍職之義兼亦御斷申上候旨申立之次第難被 聞食筋ニ候得共  
 段々申願候趣も有之無餘義被 聞食候乍去大樹同様厚被遊 御依頼候

慶喜ノ御沙汰書

間

朝家之御爲竭力速ニ奏追討之功愈可勵忠誠依之 御劍一腰賜之候事

小倉戰爭風聞

- 一 小倉戰爭之義先月廿七日之由長兵海手(大里)之内裏(大里)之内何とゐいへる所ニ押寄陸ハ延明寺と云寺に埋伏百人位いゝし候處肥後勢より見付らる及砲戰肥兵二三方より取懸打死三四十人位も有之由海手之方も別々苦戦ニ亦明六ツより七ツ時分迄ニ亦相引と成候由四分六分ト申戦ニ候由即夜内裏之長兵篝火盛ニ燃し小倉之方も同斷之由
- 一 翌日廿八日小倉之方は長兵押寄候勢之所兵散シ候由
- 一 晦日小倉何となく騒動市中之老若家片付道具等相運諸藩旅宿之者々相迦候向之由然處晝時分ハ肥後ヲ初諸藩盡解兵いゝし候由
- 一 小笠原閣老々長崎に帆軍目付も盡ク引取候由
- 一 八月朔日小倉城自燒落去之由城中も評議有之たる向ニ亦家老比志村志津馬重役外ニ兩三人割腹自燒之由

藝州口戰爭風聞

- 一 藝州表井伊柳原宮内迄出張當月二日より日々小戰有之六日晚長より五百之人數二手ニ分井伊之陣所ニ夜討いゝし候由尤風雨も烈敷不意ヲ打レ別々狼狽長兵三人五人待伏逃る者ヲ討陣所を逃出るものハ陣外へ待伏散々打成サレ敗走之由長兵ハ山上ニ兵引キ候處柳原之兵騒動ヲ聞引候處明石外ニ一藩敵之寄ると心得同士討ニ亦死傷數ヲ不知候由長兵ハ柳原陣所ヲ乗取候處即夜柳原等三藩合シテ柳原陣所要所故取返さんと押寄候處亦大敗走殊ニ追討せられ十分死傷も有之たる由
- 一 市橋ハ桑會兩公に歸國之義ヲ御進メ相成候由
- 一 以上八月十九日門脇少造入來咄之内ニ

八月十九日

松平慶永山階宮ニ歸ス

- 一 山階宮(松平慶永)に大藏大輔様御參 殿段々御嘶も被爲在會橋此上虚心平氣よして諸藩之説ヲ容るゝといへる所ハ御懸念被成候由
- 一 烏丸(光徳)様萬里(博房)小路様御正議之由

以上高左京咄

梅澤孫太郎九州ニ發足

一八月十九日橋之用人梅澤孫太郎爲御使從今日發足肥後肥前御國元ニ參御直書持參拜謁も願候趣御留守居ニ御用ニ懸合有之候之

一諸藩御召ニ薩兩肥土藩阿州宇和島尾之七藩之由

一二條殿下之方ニ去ル十八日柳藩宮川登三郎相伺候處諸藩 御召ハ從

朝廷ハ御召不相成与申事之由同人廿日入來ニ咄之

一八月十九日市橋ニ國事御委任与被 仰出候由

本文御辭退ニ御依頼之御文言ニ相替候由因伊王野咄(本意在野門)

一同日伊藤(反四郎)ヲ 尹宮ハ被召云々御嘶被爲在會之說ニ御信用ひとく御嘆息被成候由

一同 大樹危篤之御届申上候由

一同廿日市橋下坂板倉隨從

一大藏大輔様ニも同夜御下坂

慶喜下坂

黒田篠原着京

一廿日黒田(下介)篠原(冬一)今日着中國之模様相分了藝州口之方先月廿七八日比より

屢戰爭去ル二日ニハ小山ニ別而難戰之由六日明方之戰ニ宮内井伊神

原ハ敗走之由大野方ハ五部位之戰之由

一廿一日左之通

大樹様昨廿日卯上刻薨去仍三ヶ日廢 朝之事

花山院前右府様昨日薨仍三ヶ日廢 朝之事

一會不平ヲ生橋ヲ恨ミ内輪沸騰是非干戈ヲ以迫ルト云程之勢ニ候由若其

迄ニ至らばハ全橋之意不述様先將軍同様ニいふし度与之趣意ニ而段々

盡力いたし候由

一尹之御趣意諸藩御召之事も橋ニ御委任坂城ニ召會議之上橋ハ言上ヲ御

聞届といへる御趣意之よし

以上門脇伊王野之嘶之

一私義大樹爲名代出陣之義被

慶喜奏聞書

家茂將軍薨去廢朝三日

和會津一橋ノ關係不

聞食此程賜 御暇不日發途可仕奉存候處 大樹病體追々差重リ候趣諸藩一統傳聞仕九州口俄ニ解兵ニ及候趣兼而爲指揮出陣罷在候小笠原壹岐守儀も引揚歸坂可仕段申越私儀征長之任素々行届不申候故御斷申上候處目前急務國家之御安危之界ト奉存候付其旨ヲ不量一身ニ引受勉強仕候心得ニ御坐候處ニ前段事情ニ立至リ諸藩引退候上之兼而言上仕候通リ薄力非才之私此上諸藩之指揮所詮無覺東向又諸藩ニ於而も兼而之御趣意ニ御坐候折柄俄ニ解兵仕候之必定夫々之見繕も可有之御座候就而之此場ニ於テ急速諸藩呼集銘々見込も得与承了届ケ筋々利害得失論定之上天下公論之人心歸着ヲ以進退仕度奉存候私儀是迄格外之御寵恩近比厚蒙 御沙汰出陣ニ臨ミ今更右様之儀言上仕候而朝廷ニ奉對實ニ恐懼千萬奉存候得共此上御大事ヲ誤候而之如何ト恐入候付至情難默止言上仕候此段寛大之以思食徹衷之程宜敷被爲 聞召分御許容之 御沙汰被及下候様奉願前件

之次第畢竟諸事不行届より差起リ候儀ハ私於テも奉恐入候依之罪ヲ  
 闕下ニ奉待候  
 誠恐誠惶頓首謹言

八月

慶喜

右十六日奏聞之書面

慶永二條關白ニ謁ス

一廿日大藏大輔様即日中條御同行 殿下之御參殿

朝命ヲ以諸藩御召不相成候而不相濟段委曲言上相成候處條公左様之譯候ハ、

朝廷御子細無之まゝし橋之趣意夫丈之事与不被思召与之御事ニ而候處夫ハ少も相替候義無御坐御請合申上候段被仰上一應橋之御懸合之上与申事ニ相成道島八左衛門之一封御渡廿一日下坂之事  
 一道島下坂形行言上之處大事之譯故篇与御熟考追而御答可被成与之御事ニ而廿二日道島上京

一 (原市) 具ニ言上仕候處尙昨夜中御勘辨被爲在候との御事ニ奉今朝ニ至リ御別封御返翰御下ケ付則相廻申候今朝迄も御地被達候御都合ニ無之候不<sub>レ</sub>え 關白様思召ニ相叶申間敷候得共後ニ大關係有之様ニ付厚御勘考被爲在候不<sub>レ</sub>段々御延引ニ相成候次第程克御取繕御不都合無之様被仰上可被下候且 御趣意柄委敷相伺申さ<sub>レ</sub>候得共諸藩召之儀斷然 朝廷より 御沙汰ニ不<sub>レ</sub>え後々ハ悉皆御引受相成候様之事ニ可立至左候不<sub>レ</sub>え御不都合ニ付此程被仰上候御趣意ニ基キ右之御挨拶<sub>レ</sub>てらの御沙汰被仰出候方ニも可有之哉と之御事ニ粗相伺申候右之段八左衛門へ被申聞友四郎所<sub>レ</sub>可然相答候様御取計可被下候此段御答旁如此御坐候以上

八月廿三日朝

原市之進

辰上刻

大樹薨去ニ付キ征長ノ兵ヲ休メシム

一大樹薨逝上下哀情之程も御察被遊候暫兵事見合候様可致旨 御沙汰ニ候就テハ是迄長防ニおひて隣境侵掠之地早々引拂鎮定罷在様可被取計

候事

別番之通申達自然長防ニおひて背命候ハ、早々討入候様可被致事  
 一大藏大輔様尙於浪華御盡力廿五六日御上京之賦候事  
 一橋方 殿下<sub>レ</sub>返翰廿四日相達候事

但趣意不相分候得共大事ニ關係い<sub>レ</sub>し候付上京之上委曲可申上与之  
 事候由

一廿五日新納大夫吉井着京<sub>(幸)</sub>事

一大藏大輔様御下坂之處原市之進上京行違ニ相成 大藏大輔様 橋拜謁御用ニ奉御逢無之八月廿五日 御歸京

一廿六日原 殿下<sub>レ</sub>被召候事別段原ヲ以御召之一條御願相成候事 殿下ハ彌御決シ内實ハ昨日御評議之筈候得共 尹宮御不參故廿八日 御評議之筈候事

一廿八日 朝議之趣

原市之進ニ條關白ニ謁ス

諸藩京都へ召集ノ  
件ニツキ朝議

四卷 (慶應二年八月)

二百八十八

此程徳川中納言言上之趣被 聞召候就ハ神速諸藩京師に呼集一致  
ニ力ヲ以早々鎮定 朝威凜然ト相立奉安 叡慮候様可取計被 仰出候  
事

別紙ニ

諸藩呼集之事遲延ニも可相成候間御直ヨも可被達哉左候ハ、誰々申  
邊相調早々言上可致事  
一一致ニ力を以早々鎮定 朝威凜然ト相立右十七字無之方可然

八月廿八日

晃

柳原殿

一被尋下候旨承候別存無之併呼集人數中納言に被尋下義ニハ候得共公平  
至當之處ニ無之亦大ニ紛亂可生篤与御勘考云々

(備大志) 公純

柳原殿

一諸藩京師に被召集以至誠至公ニ 御趣意御國是被相立候間各一致ニ力  
ヲ盡し

皇威凜然神州安泰之様可取計被 仰出候事

右之通被

仰下相當与奉存候且列藩ハ國主各可被召是至公ニ義与存候但御目的  
之方有之候ハ、其分可被召候得共國主一同ニ方公平ト存候

(正徳町三條) 實愛

柳原殿

右之通ニハ廿八日御決議ニ不至御再評之上相決候由

一同晦日大原卿中御門卿以下二十二入國事言上之旨ヲ以不時 御參相成  
候事

一中御門卿二條家に御參殿御趣意御演說御參御願相成候由

一國事掛御一同議傳御參被爲在野々宮々不參

大原中御門卿等二  
十二人參内朝政改  
新ノ要務ヲ建議ス

四卷 (慶應二年八月)

二百八十九

一御一同御參御詰所に大原卿御出今日國事ニ付言上仕度儀有之同列申合  
列參仕候御一同御揃之處ニ言上仕度御直言上奉願候旨御演說之處  
殿下御承知ニ被遂言上候處無程

出御被爲在御一同御列席之處ニ大原卿以下廿二人被爲召左ノケ條大原  
卿言上之由

一諸藩御召之儀片時も難差置急務ニ候處先日も御評議被爲在るら未今  
日迄も御達も無御坐由誠ニ以案外ノ儀与奉存候早々御決定斷然御達  
相成度云々

一當時多端之時節人材御用ひ不相成候も不被爲濟候付戊午以來幽閉被  
仰付候面々御赦免出仕被仰付候様別段人材与申丈之者も有御坐間敷  
候得共夫々御用相立可申云々

一長防解兵之事以朝命斷然御沙汰相成候様無左候も人心不相定云  
々

以上今日中御決議被爲在御首尾相伺退朝仕決心ニ御坐候

一是迄

朝廷御失體不少より今日之次第ニ立至リ候適朝議ヲ以御決定之事も  
幕府言上ヲ以御轉移相成則長防之事ニおひても寛大之御趣意之處言  
上ニ付云々ト御沙汰相成候様之義大ニ人心疑惑仕候次第ニ御坐候  
論言不可返もの克々御熟考以來

朝廷ニ

朝廷ニ御體裁被爲立候様屹度御變革被爲在度之し此儀ハ急速ニハ  
出來申間敷候間克御評議も有御坐度云々

右四ヶ條言上相成候處

御上よりヶ條一々御承知不被爲遊候勿論此位之義言上いたし候ニ  
事々敷列參ニ及事甚不敬之至りと

御沙汰暫時して亦此義左様言上いたし候ハ、昨年兵庫開港之節之實ニ



神州ノ御一大事ニ付其時社可申上事ト

御沙汰も被爲在候由一同御平伏ニ候由 殿下より御沙汰ニ申立之條  
 々々尤之至畢竟今日之御失體ニ至リ候義其罪御自身ニ歸候段 御沙  
 汰有之候處大原卿より夫々決之左様ニ無御坐云々被仰上候處 賀陽宮  
 之畢竟御自身ニ罪ハ歸し候段 御沙汰有之候處決之其通ニ御坐候全體  
 粟田宮ニ御法體被爲在候ニ何ノ爲 御歸俗被爲在候哉然ニ今日人心  
 一同不伏御失徳ヲ生候ニ至リ實ニ其罪御一人ニ歸し候段御面拆被成候  
 一諸藩御召之義尤之事ニ候早々御召不相成候之不相濟事候得共中納言ノ  
 言上之趣も有之原市之進よりも其爲上京言上之次第も有之全御聞セ不  
 相成候之信義ニ背キ候間一應御申聞之上早々御發相成可然与之趣殿  
 下ノ御論ニ其通相決候由

但大原卿御説ニ

朝廷斷然御發相成候ニ付中納言ハ諸藩上京之上夫共ニ盡力以之

し候様 御沙汰相成候筋御決定ニ候由

- 一 御上ノ幽閉之堂上御宥免之義御承知難相成夫程議論いふし候ハ、不日  
 ニ大原ノ御直ニ論被聞召度候間一人參 内相成候様 御沙汰ニ御一  
 同退 朝之由
- 一 一同退出之上 小御所ノ殿下始御出席ニ向幽閉堂上方 御宥免之義  
 御願相成候得共今晚ニ限リ候義ニ無之与 御許容無之由
- 一 大原卿可被爲召候義氣受ニも可相拘候間早目之處殿下ノ御願相成二日  
 ニ御決定之由

九月朔日

一大原卿ノ野津ヲ以云々書面ヲ以申上候事

同 二日

一八時大原前左衛門督様御參 内無程

御前ニ被爲召先日言上之條々委曲

大原卿參内主上  
ニ拜謁委曲奏上

御尋問も被爲在度候處一同列坐も有之候付御憚被遊候ニ付今日巨細申上候様

御沙汰ニテ 御膝下ニ被召無殘所言上相成候由

八月晦日列參ノ公卿

八月晦日列參之公卿方左之通

中御門左大辨宰相經之卿  
 大原 前左衛門督重德卿  
 北小路左京權大夫隨光卿  
 高野 三位 保美卿  
 穗波 三位 經度卿  
 高倉 三位 永祐卿  
 櫛笥 中 將隆詔朝臣  
 愛宕 中 將通致朝臣  
 植松 少 將雅言朝臣

園池 少 將公靜朝臣  
 高辻 少 納言修長朝臣  
 千種 侍 從有任朝臣  
 長谷美濃權介信成朝臣  
 岩倉 侍 從具綱朝臣  
 四條 大夫 隆平  
 西洞院 大夫 信愛  
 西四辻 大夫 公業  
 愛宕 大夫 通旭  
 澤 主水正 宣種  
 大原左馬頭 重朝  
 岩倉 大夫 具定  
 高野 少 將保建朝臣園池頭ニ入

當日參 内之御人數

以上廿二人

關白殿下

尹宮

常陸宮

内府公

九條大納言

正親町三條大納言

柳原大納言

飛鳥井中納言

六條中納言

久世前宰相中將

上京ヲ命ズベキ諸侯

右自身上京候様

尾張前大納言

紀伊中納言

松平加賀守

松平關叟

右銘々當主可被召之處御用筋御都合も有之二付當主代りとして  
上京候様

松平容堂

伊達伊豫守

島津大隅守

細川越中守

右御用筋御都合も有之二付

長岡良之介も

一同上京候様

松平阿波守

淡路守

松平美濃守

下野守

右父子之内上京候様

松平(後野茂良)安藝守  
 藤堂(高直)和泉守  
 松平(久松勝成)隱岐守  
 式部大輔  
 松平(伊達重邦)陸奥守  
 松平(池田隆徳)因幡守  
 松平(慶徳)三河守  
 松平(定守)出羽守  
 有馬(慶頼)中務大輔  
 松平(池田茂政)備前守

右面々上京候様自然病氣等も候ハ、御用筋請答出來候重臣之内  
 差出候様  
 右之外上京之分

立花飛驒守

松平大藏大輔  
 松平(容保)肥後守  
 松平(定敬)越中守  
 上杉(重忠)式部大輔  
 以上

慶喜上京

右原市之進々差上候由九月四日夜藤井方(貞徳)  
 一今日 尹宮國事御扶助も御斷のよし  
 一德氏九月五日上京之事  
 但御遺骸二日晚方御發船之由

一一昨五日方内府公ニも二條家の御參候得共御逢不被爲在候由

九月七日

勅シテ久光公ヲ京ニ召ス

島津大隅守

德川中納言言上之趣も有之諸藩衆議可被 聞食候間速ニ上京致し決議之趣々中納言を以可有 奏聞旨被 仰出候事

九月

慶喜容保上書ノ寫

追テ修理大夫可被 召之處御用筋御都合も有之ニ付上京可有之候此度關白殿下賀陽宮御辭職被仰立候よし當今内外紛亂之御時勢樞要之御職務萬一御動搖ニ相成候様ニ有テ天下之動靜ニ相拘リ國家之御爲以外有 御儀与深ク痛心仕候殊ニ此程言上之通諸藩參集利害論定可仕折柄總テ變遷之儀御坐候有テ不都合之儀ト奉存候まして萬機之任ヲ輔翼之御辭職被仰立候段

朝廷如何様之御混雜有之儀与諸藩之疑惑を開キ此上以外之事變相生候様罷成候有テ折角言上之素意も不相貫且おひくの御勤勞も有之格別御信任も被爲在候事故此場ニ於テ彼是之御次第も可有之筈も無御坐候旁早々被召留候儀勿論之御事ト奉存候得其實ニ國家之御一大事ニ可相拘過慮仕候付何卒速ニ右之御沙汰被成下上下安堵仕候様御取計之程奉願候何分切迫之御時勢此段難默止言上仕候事

九月六日松平越中守を以飛鳥井中納言へ差出ス

加茂

谷森大和介

木屋町二條上ル邊

野口隆正

裏辻痛邸へ投書寫

九月十一日晚裏辻中將殿御宅へ投書寫

艸葺之小臣等謹テ裏辻中將殿閣下ニ白ス閣下御事元來

四卷（慶應二年九月）

三百一

朝廷良位之御方故天下之爲御盡力被爲在事与憂國之士民舉而渴望罷在候處近來如何被爲迷候ヤ

朝廷之御恢復ハ毫も御懸念無之却而賊徒一會桑等之逆意ヲ御助被遊甚敷ニ至而夫尹宮与御同謀之上深 宮へ御取入官女を以て密々

天皇を奉欺逆臣徳川をして永ク天下ノ大政ヲ執し然んと奸謀何事そや恐多クも

後白川天皇以來武臣之爲よ

朝廷之御衰弱ニ相成候段有人心者誰り涕泣悲歎せさらんや徳川ニ至リ逆意日ニ増長し終ニ今日ニ至リ候段實ニ千載迄之遺憾ニ御坐候依之英明之公卿方御憤發被遊御大政之御基本條理相立候との御赤心よ去月晦日御列參御建白被爲在候處閣下ニおゐて佞奸百出是を拒剩奸曲ノ賊等へ詔諛隱謀を以御妨被成候件々天下之有志舉而所知ニ御坐候實ニ天地不可容之罪也 雲上之御身ニ無之候得夫天誅不可免候得共飽迄被

蒙

朝恩候御方ニ御坐候得夫此節迄ハ差控罷在義ニ御坐候今日旁屹度御悔悟御改心 尹宮幕府之念ヲ絶チ雲上方を邪道ニ引入候奸謀ハ勿論御所勞ト稱し參 朝を被爲止候様仕度奉存候既ニ勇壯之者共憤懣堪兼甚敷議論も有之候付而夫奉穢御衣裳も至リ可申夫必然之義故我々共暫取鎮メ置奉諫言候若又御改心不被爲在候得夫天下之御爲不得止我々共右壯士等同様白乃ヲ以奉拜謁候外無御坐候何分も此段御賢慮を以御改心被爲在候様仕度奉言上候頓首謹言

慶應二年 丙寅九月

憂國之士等

一九月十日后

慶喜除服出仕ノ件

徳川中納言除服出仕之義 殿下御封中ヲ以 内府公 山階宮ニ被仰

進候

但將軍同様御會釋之義頻原市頻周旋いふし候事

九日

一山階宮殿下に御出御辭職御留之事被仰入云々之事

十日

一從内府公藤井ヲ以御相談被爲在云々御返詞申上候事

十四日

一德大寺殿陽明家(近衛家)に御出被爲召罷出云々之事

十六日

勝安房歸京

一勝房州歸京書面青山小三郎ハ十六日持參中國筋都合も宜敷引取之由藝州寄手も追々引取之模様長兵も境内へ引取候由

但休戦之義等最初之譯与ハ相違房州も不平之由

人物之由

廣澤兵助

春木強四郎(太田市之邊)

高田春太郎(井上郡多)

長松文輔

右談判人數本藩用人邊之由

山階宮德大寺卿等ノ上表

一方今不容易世態ニ付不願恐言上候關白ニモ辭職出仕モ無之且諸藩ニも被 召寄候

御沙汰も有之旁關白出仕且諸藩上京迄之處大小共國事關係之儀ハ暫被 差置尙諸藩上京之上厚被盡衆議天下之公論ヲ以被 聞食度奉願候事

九月十六日

道孝

實良(二條)

忠房

晃

議奏中

右十六日朝被差出同日内府公山階宮其外御參御直 奏被爲在候處別  
不克御都合ニ言上之通被爲 聞食候由

尤 除服出仕之事も不免之筋御吟味之事

仁和寺宮山階宮ヲ  
訪フ

一同十七日 山階宮(仁和寺宮) 仁門公被爲 入御召ニ參殿段々國事之御議論  
被爲在候事

總大寺卿等ノ上表  
ニ對スル御沙汰書

一右府以下言上之趣一昨日被 聞食候其後 御熟考被爲在候處雖關白不  
參於里亭内覽執政先蹤候旁於國事被差置候得之國政暫被廢候様相聞拘  
朝憲候間矢張小事之依緩急可處置尙重事之諸藩上京之上衆議被 聞食  
度更 御沙汰候事

一昨日御連名ニ御建白之末 常陸宮以下被及言上被 聞食候處尙又  
御熟考別番之趣被 仰出候尤御書取ニ被 仰出与申譯ニハ無之候得

共爲不問違御趣意柄御廻達可被成下候此段宜預洩達者也

九月十八日

兩役

右大臣殿

諸大夫中

海江田歸藩利通書  
ヲ托ス

一九月廿三日海江田(安)出立ニ付御國元ニ問合差出尙左手控書相渡

一九月十日前后除服出仕前將軍同様之御會釋向之義原市等内々周旋い  
し候事

一尾紀、藝、因、備、阿、肥後、肥前、上杉、川越

右外十藩餘及會議川越藩久松某諸藩 御召ヲ止將軍推任を圖らんと議  
し因藩某大ニ論破し其說瓦解ニ退散之事

但諸藩をして推任を盡力せし免候義其根據畢竟原等より起り候事与被  
察候

一本一橋御附穂積亮之介當分旗下ニ被召出前條推任一條等諸藩ニ説客い



ふし宇都宮藩某に正三卿幕府之事御引受盡力被下候様周旋ヲ頼候事  
 一去ル十六日別番之通内府公 山階宮御談合ニ諸藩來會迄國事無大小  
 不被議筋 御連署ヲ以御建白尙即日御參之上被及  
 奏聞候處言上之通被爲 聞食候事

一同十八日 御別番之通小事ハ被開候筋兩役より廻達相成候事

大山彌介廿三日出立右趣之書面長に持參之事

西郷信吾中岡慎太郎上京利通ヲ訪フ

一西郷信吾石川誠之助同道之廿四日上京廿五日入來事情承ル勝房州談判  
 之趣ニ亦是迄段々相違いふし候義有之解兵之義御請難仕段返答之趣  
 ニ候事

波多野金吾變名

廣澤兵助

太田市之進

春木強四郎

井上文太

高田春太郎

川瀬彌七郎

長松文輔

一近々筑前より出京之由

家老壹人

用人川村五太夫

柳藩

十時無事老

小松一松

岡啓三郎

武島鎌三郎

梶山安三郎

右大坂の蒸艦便舟願

一小倉藩澁谷舍人妻

右小倉落城の折一人戦死

會津

木村銀右衛門

藝藩

船越洋之介

立野一郎

小林柔吉

慶永ノ建白書

一 越老公建白之由

此度御再討被 仰出候砌如何之御次第ニ候ヤ恐歎之餘リ不取敢奉伺候  
處再發之趣有之途ニ天下之大兵ヲ被動御糺問之處其實亦く隨而

御所々被仰渡候得共大兵境ニ臨ミ御武威ヲ以令承服候様之御仕向ニ而  
紛議相起リ諸侯も名分正否彼是疑惑ヲ抱キ候様ニ相成途ニ今日ニ立至  
リ候儀ト奉恐入候傍熟慮仕候ニ外夷之事起ル以來乍恐公邊ニ而も御失  
躰之義も被爲在人心不平之情途ニ長防征伐之可否ト相成來ル事候得共  
廣ク天下之侯伯ニ相議シ私政ヲ去リ公平ニ御從ヒ被成候義大御急務ト  
奉存候就中異議ある諸侯ニハ早々御推問有之御平心を以御聽納御反正  
ニ相成候様願度左候得々自然公平之理明寛猛至當之御所置相定リ御國  
是爰ニ立可申与奉存候近來英佛二國各其好ニスル處ヲ益親睦を結ヒ我  
國をして分崩離折をし然んとする勢も有之鵠蚌之利ヲ納ノ術ニ陷候も  
難被計哉ニ被存尤可恐之至ニ候是等ヲ以テ考候得々外國之侮ヲ禦候ニ

皇國ヲ一致ニ被成候儀御根本ニ有之長防之事件ハ諸藩之實議御推問御  
講究被爲在心志ヲ御合セ被成候儀御先務ト奉存候本末先後之分瞭然と

御辨別被爲在候ハ、假令御征伐中と雖順序ヲ追ふ之御處置之如何程も可有之儀と奉存候只今之姿ニ奉<sub>レ</sub>勅とハ乍申何處迄も盡力ヲ以届服仕候様被成候儀ニ奉正大之理ニ非<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>諸侯も各隠然与一趣向を立候様ニ相成假令一長ハ亡候共又一長ヲ生シ可申且士民困究より禍蕭牆之内ニ起候儀等ハ篤与先日申上候通リ之儀ニ御坐候付何分正大ニ御襟懷を被爲開御政令御一新上奉安 宸襟下蒼生之苦を被爲救候儀必至奉仰願候菲才淺見之私殊ニ隱居之身として毎々大政ヲ議し候儀毎々奉恐入候得共國家之危急ニ迫候義奉對 祖宗之神靈候亦不忍沈黙冒萬死及建言候幾重ニモ御採用被成下候様伏<sub>レ</sub>奉冀候誠恐惶謹言

八月

松平大藏大輔

一 九月廿七日土藩武市八十衛酒井藤藏越藩伊東友四郎取會之事

一 九月廿九日内膳殿<sup>(前田)</sup>御口上ヲ以御内達左之通

内府公御使者として藤井宮内<sub>レ</sub>當時段々不容易時體ニ相成追々諸藩上

藤井良節ヲ以テ近衛公ノ意ヲ利通ニ傳フ

京等有之候得ハ御多端之御事ニ別<sub>レ</sub>御配慮被遊候付去ル戌年以來<sup>(小)</sup>帶刀殿兩人<sub>レ</sub>御馴親も被爲在候得<sub>レ</sub>邸内之事も繁用可有之候得共時々參殿い<sub>レ</sub>し御次にも御案内<sub>レ</sub>しニ罷通吳何扁無御遠慮申上諸事御相談可被遊与<sub>レ</sub>御趣意ニ奉内膳殿被致承知就右表通被 仰付儀ハ御國元<sub>レ</sub>伺<sub>レ</sub>上ならて<sub>レ</sub>難相成候得共御由緒も有之 御家之事候得<sub>レ</sub>内々ニ奉御受申上御用透ヲ以相勤候様可致与<sub>レ</sub>趣承知候事

御勘定奉行

小栗<sup>(上)</sup>野介

右幕役ニ奉當分手延候由此内上京

一 九月廿九日吉井幸輔京着

一 同日陽明家<sub>レ</sub>參 殿御用人取次ヲ以御禮申上御近習<sub>レ</sub>罷通拜 謁被

仰付以來家中同様存シ無伏臆萬事申上吳候様是迄志之次第 御感被遊候趣云々御沙汰ニ奉難有御禮申上置候事

吉井着京

利通近衛公ノ好意ヲ謝ス

一十月二日新納家着京

松平慶永歸國ニ就  
テ挨拶アリ

一十月朔日越藩青山小三郎入來今朝 大藏大輔様御出立就御引合い  
し置候様 御沙汰之趣ハ無御據御譯柄ニ付一應御歸國相成候次第ハ伊  
東より巨細御承知通ノ事ニ候尤 大隅守様ハ御直書ヲ以被仰進候趣  
も有之其外宇和島等ハ御同様之事候得共只今御歸國之事甚御不本意  
之次第故則御書ニモ被進答候得共早々之御立ニ其御都合不被爲出  
來候間其邊宜敷申上吳候様且亦 大隅守様御上京之御模様相分候次第  
ニハ御道中へ御振向申上越賦候間爲知吳候様  
一字和島侯御上京之事

山階宮ハ云々御書も參候付是非御上京不相成候ハ相濟兼候ニ付御國  
カも御直書且御使ニモ被差向御周旋被下候様云々

右之趣小子迄引合置候様御沙汰之由

一八月廿五日 御花島二條殿高塀等張昏寫

二條關白邸張紙寫

尹宮關白野宮廣橋四奸之儀從來橋會兩賊ニ相結ヒ正義正直之徒ヲ陷  
邪詔奸曲之輩ヲ用ヒ廟堂之大事ヲ誤候條其罪不遑枚舉候得共差當此度  
一橋中納言前惡ヲ悔悟致シ罪ヲ

朝廷ニ謝シ征夷之職ヲ奉辭天下列侯ヲ 闕下ニ被召寄正評  
勅裁被爲在防長之御處置御定ニ相成候様申立も有之候處右四人之意列  
侯ヲ 闕下ニ集候者可然与ハ一人も申者有之間敷既ニ先日薩肥藝備越  
阿等より建言も有之必定寛大之御處置ニ可相成候間皆利害禍福ヲ考へ  
己ニ不便成ヲ憂ヒ強テ幕府へ御倚頼被遊列侯大坂城迄召寄候議論可否  
曖昧糊塗可致様取計專ラ私權ヲ振ハシ

王家之衰弊ヲ利ト致候既ニ奸謀顯然ニ此上ハ橋納言之例ニ倣ヒ悔悟  
謝罪其職ヲ奉辭退テ天下之公論ヲ待可申候若其儀無之候ハ天地神人不  
容罪如何様之戮刑ヲ蒙リ候共不可計幸ニ可被熟察候者也

公卿列參大意書寫

一列參大意書之寫

八月晦日大原卿始二十二人堂上方御參

内即刻中御門二條殿下御出御拜謁之上中卿曰今中ハ宮中ニ於テ建言仕次第有之三番所内外御近衆外様衆同列參 朝罷在候ニ付早々御參被成候様被仰上候處殿下曰

朝廷ニテ建言之次第ニ定テ 尹宮且我身ニ相係リ候儀ニ可有之彌我身上ニも關係致候儀ニ候ハ、無遠慮申聞ラセ候様御尋之處中卿曰尤仰之通ニ御坐候尤御前之上ニハ決テ相係候様之儀ハ無御坐候得共 尹宮ハ定テ御參も相成可申候ニ付御廊下ニおひて御關留メ申上候手筈ニ決議ニ相成居リ候与被仰上候處殿下曰建言之次第ハ如何之事柄ニヤト御尋之處中卿曰 朝廷御失體之儀ニ付 尹宮野宮之兩奸ヲ退職被命候様仕度次ニ幽閉之堂上方被免方等之儀言上可仕様与、被申上候處殿下曰其儀ニ候ハ、尹宮ニ不限我逆モ同罪今更歎息之至是迄着眼一々相違失策ニ出テ 朝廷御失體ト相成候儀實ニ我罪之ト只管御悔悟之體ニテ被仰

出候ハ、尹宮逆も天下之混亂 朝廷之御失體ヲ被爲好候譯ニハ決テ無之唯上下安堵之道ヲ被盡候事一々失策ニ相成候事ニ候得ハ格別其志ハ可惡譯ニハ無之何分當今之形勢ト相成致方も無之建言上之次第ハ尤至極之事ニ我逆も辭職ハ外無之儀ニ候得テ誠幸之事今日申立之儀ハ何分盡力いゝし幽閉之堂上丈ハ今日中被免候様取計可申候付 尹宮之儀ハ大廊下ニ差留候義ハ不容易都合ニも可至ヤト甚心配いゝし候付其義ハ相見合何れも列席之上

主上御前ニ於テ 朝廷之御失體ヲ言上之時ハ其罪之歸スル處 尹宮我兩人ニ有之事故 御前ニおひて伏罪自分辭職不被致時ニ我明日を限り退職可致候付 尹宮とても一職ヲ難相成若其儀も齟齬いゝし候時ハ幽閉堂上をハ被免候得ハ其内ニハ秀才の仁も有御事故如何様とも相成可申何分其都合ニ相心得吳候様被仰合付中卿御歸宮御列參之方々御一同御請ニ相成候夫ハ殿下御參 内之上右三番所ハ國事掛建白之趣ニテ御

参<sub>レ</sub>有之候様 尹宮初御已下<sub>レ</sub>被相達午刻<sub>レ</sub>申下刻迄攝家宮方以下御  
参 内也

御不参<sub>レ</sub>之御方 鷹司殿德大寺殿<sub>レ</sub>外國事ニ關係<sub>レ</sub>之御方不殘御参<sub>レ</sub>之由

之

一 宮方三卿以下御列参<sub>レ</sub>之上中卿大原卿<sub>レ</sub>殿下<sub>レ</sub>言上ニ<sub>レ</sub>去今日去國事之儀  
ニ付言上仕度次第有之<sub>レ</sub>三番所<sub>レ</sub>之内同列中参 朝罷在候尤

主上御前ニ<sub>レ</sub>おひて言上仕度候付御列席被成下候様被仰上候處 殿下<sub>レ</sub>

直ニ奏聞夫より

主上御前<sub>レ</sub>被爲召何れも列席之上大原卿<sub>レ</sub>言上有之候ハ列藩被召方之  
義ハ追々 朝議も有之候様承リ居候處今日迄も御因循被爲在天下之形  
勢實以切迫<sub>レ</sub>之頂上此上御因循被爲在候<sub>レ</sub>去不容易御國難も可相生何分  
今日中御決議右  
勅命御下シニ相成度段被仰立候

一 甲子以來幽閉<sub>レ</sub>之堂上早々被免度今日之儘ニ被召置候<sub>レ</sub>去不宜候段

一 征長ノ儀早々解兵被 命度段

一 朝廷御失體論云々不論定朝ニ令シ夕ニ變スル等<sub>レ</sub>之事件一々被仰立候由  
右言上<sub>レ</sub>之處

主上殊<sub>レ</sub>之外 御逆鱗被爲遊四ヶ條件々何れも御不承知<sub>レ</sub>之由被 仰出候  
處殿下云大原左衛門督<sub>レ</sub>言上<sub>レ</sub>之件々何レも尤至極<sub>レ</sub>之次第ニ御坐候 朝  
廷御失體<sub>レ</sub>之儀ハ實ニ我罪也ト被仰候處大原曰夫ハ決<sub>レ</sub>御前<sub>レ</sub>之御罪ニハ  
無御坐候御前<sub>レ</sub>之御職掌ハ天下萬機<sub>レ</sub>之爲御長御職任ニ御坐候得<sub>レ</sub>去強<sub>レ</sub>而國  
事而已ニ御關係被遊義<sub>レ</sub>去無御坐是ハ國事而已ニ御係リ被成候御方<sub>レ</sub>之罪  
ニ候旨得ト被仰上候處 尹宮曰丁度其通是ハ我罪<sub>レ</sub>ト被仰候處大原曰  
尤仰<sub>レ</sub>之通リ斯ク 朝廷御失體被爲致候儀ハ皆御前<sub>レ</sub>之罪<sub>レ</sub>あり如何ト<sub>レ</sub>あら

主上ニ<sub>レ</sub>凡御寛大<sub>レ</sub> 叡慮ニ被爲在候處幕府一橋以下<sub>レ</sub> 朝議ト相成

御失體相成候事ニ候是ハ何分早々御改政不被爲遊候不去一日も難相濟此上

主上之御失徳ヲ天下ニ顯シ候而已ニ不實以痛心仕候次第ト被仰上候處尹宮曰如何ニモ我罪也今更先非ヲ悔ミ候外無之實以恐入候与被仰伏罪被爲在候由之

一主上宣ク

朕ニおひて一々不承知夫程國事懸念之義心屈も有之候不去昨年攝海（大形）ハ異船來候時こそ何ヲ歎申出さる其節不何事も不申して今日ニ至リ（大形）横行ニ企申立之義何共解シ難依不明後日大原壹人可罷出一々

朕ト議論可相試との段被 仰出候之然る處殿下不諸侯被召方之義ハ何分不被命候不去難相濟段 奏聞之處 御聞濟ニ相成同夜御決議ニ相成候由之尤元來一橋不依 奏聞

朝議ニも追々相成居事且同日朝市之進を以殿下不右諸侯召之

勅命若シ下リ候様相成候ハ、其以前ニ御通達被成下候様願出居候付旁以一橋不御通達之上右 勅命ハ下リ候様御評決ニ相成候由之  
主上御逆鱗之儀ハ御深意可被爲在候事ト被考候其證ハ二日大原卿御一人被爲召候譯ニ不考へし

九月廿三日御封書ノ寫

一九月廿三日御封書之寫

上包

内密

此書取決不此通リニ願度与申次第ニ不去更ニ無之候勿論下官限リニ先々ケ様之振ニ被 仰出候ハ、可然哉ニ申居候付同日此儘打明申入候

一防長鎮定候模様無之内國是等之 御沙汰差支候事

一諸藩不御沙汰之趣ヲ以御取調奉願候事

徳川中納言言上之趣も有之諸藩衆議可被 聞召速ニ致上京決議之趣ハ

中納言ヲ以可有言上旨被 仰出候事

過日徳川中納言へ及内話候返答市之進演舌ニ不申出候右手控其儘内々

御傳達申入候事

上包

手控

防長之儀追討被 仰出既ニ賜御暇候上之彼是与言上可仕筋無御坐候得  
共何分諸藩之形勢一樣から從之種々之風説も相聞甚以痛心之次第右  
ニ付再三勘考仕候處所詮一致之力ニ無之而夫國家之大事此上成し遂ケ  
候見据も無之瓦解ニ及ヒ挽回難計事ニ落入候ハ不容易義ニ奉存候ニ付  
急速諸藩呼集利害得失論定之上尙伺  
叡慮萬事處置可仕決心ニ其儘過日言上仕委細被 聞食候儀ニ御坐候  
得共追々人心疑惑之折柄別段

朝命無之而夫急速參集如何ト懸念之向も有之即今之時勢遲緩ニ及候夫  
不可然相考候付何卒前顯速ニ取計候様譯テ 御沙汰被成下度旨尙又奉  
願儀ニ御坐候然ル處此度 朝議之上是非  
朝命ヲ以御直ニ可被爲召哉之趣 御内意被 仰聞候夫ハ過日言上仕候

素意ニハ無之候得共從 朝廷被爲召敢テ差支之筋ハ無御坐候只今前文  
言上仕候義ト自然御異同之御趣意之趣諸藩伺取候而人心却テ疑惑を開  
き候程無覺束過慮仕候付右申上候迄夫無御坐候得共是等之事情篤与御  
斟酌之上宜敷御取計被爲 在候様仕度奉存候事

一拾万石以上之藩遍被爲 召候夫公平之筋ニ御坐候得共諸藩疲弊之折柄  
中ニハ幼若之者も御坐候間國持并防長關係御坐候有名之者共呼集候積  
ニ御坐候右姓名別番ヲ以テ申上候

別番名前書頭ニ留有之候

議奏衆ハ一條殿ニ封書之寫

諸藩召之儀別番之通被 仰出候即寫差上申候於此度ハ殿下御不參御衆  
説紛々ニ付全以 叡斷御治定ニ相成候此旨申上候也

九月八日

徳川中納言言上之趣有之云々前ニ留有之



一中納言過日言上之趣被 聞食別昏諸藩 御沙汰相成候ニ付而夫上京候  
ハ、早々決議可有言上旨 御沙汰候事

一十月五日伊王野宮原大輔入來說原市之進 殿下御出職無之候而中納言  
參内候亦も無益ニ付近々周旋ニ取掛候と之趣

一土藩武市八十衛入來

一今朝中御門卿の御直書被下候尤御相談被爲在候事件御到來ニ付參 殿  
候様与之趣ニ而今晚參 殿仕候處段々御嘶有之一向御國に御依頼被遊  
以來萬事無御伏臆申上御忠魂貫徹候様補助可仕候間段々 御懇命承知  
以來御書通申上候節ハ左之名前之者ニ宛差上候様

利通中御門卿ノ懇  
命ヲ受ク

城 連  
奧 澤 要 人

一今夜伊藤友四郎の勝房州書翰相達ス昨四日朝出立之由之

一同日伊十院中村歸京品川外ニ伊原小七郎清水二三郎兩人同行

一十月五日於<sup>(鎌田)</sup>せん越藩土藩ニ會ス

一同六日内府公に當職御出仕御盡力被爲在候様 眞翰ヲ以被 仰下候一  
條ニ付參 殿愚存云々言上いゝし候事

一同七日尙一封ヲ以内府公に建言いゝし置候

一中御門卿 陽明家の參 殿藤井に一封御渡小子に御逢之賦之處外出之  
由故御傳言有之

一八日柳藩十時等宇治同行

一九日訪土藩武市氏

一山階宮二條家に參 殿被爲在候由

一十日高崎子同道謁 内府公 徳中參<sup>(徳川慶喜)</sup> 内一條云々言上克御受合ニ而候

一條公に御參 殿公ヲ以御出仕御進メ私ヲ以不可然利害御存寄被仰上候  
處條公御得心之由

一今晚飛鳥井柳原 御殿へ被召 山階公御列席 徳中御禮參 内不可然

旨御説得被爲在克御都合之由

一 今日暮中御門卿に參殿

一 十一日伊王野入來

一 烏丸卿偏執慢心

一 中山卿(志能)平々雖然人望有之

一 滋野井卿(實任)平々之由

一 萬里小路卿

一 備前藩 家老

隨分正議 壹岐(伊水忠厚) 長門

比丘

一字和島 留主居

水野八左衛門

十一日

山階宮原市之進ヲ  
召ス

一 階宮に原市被爲召云々御諭解之處中納言に申聞兩日中何分御返事可申  
上段申上候由

十二日

一 原市 宮に參 殿云々申上候由

十三日

一 江戸に之飛脚今日被差立問合差出

紀藩三浦休太郎激  
論

一 越前松平寛之介入來紀藩三浦休次郎(休太郎)与申仁越藩に相見得橋公參 内當

職出仕之事御國因備肥後藝藩土藩等申談盡力有之由ヲ以テ頻ニ激論い  
ゑし候由

十四日

一 陽明家出殿 柳原卿參 殿ニ被召候罷出候處原市之進今朝 柳原卿  
の參 殿言上之次第

慶喜參内ノ件

一 徳川中納言參 内之儀於 朝廷異議不被爲在尤於 宮御異存不被爲在

候得共迫ル藩有之与之趣 御沙汰ニテ尙中納言承知之上右迫ル藩有之候ハ、直ニ説得可致候間爲御知被下候處大ニ御當惑被遊決中納言參内之儀御異存不被爲仕段 御沙汰承知仕直様二條家の參 殿之處御對面無之諸大夫取次ニ右形行申上候處御異存無之与之御事候間左様ならハ早速御兩役の言上可仕段夫ニハ不及此方の兩日中ニハ相見得候間其節沙汰ニ可及旨 御沙汰ニ候得共今朝飛鳥井家にも參 殿も仕候旨云々

右通之形行ニハ 内府公も別ニ御當惑ニ如何いふし可然哉之旨 御沙汰ニハ何分明朝迄御待被下候様申上置候

一 高崎左京の形行申入 宮の形行相伺候様引合候今晚高崎井上國分三人ニハ形行奉伺候處全右之趣 御沙汰相成候義ニハ無之先日井上の御嘶被爲在候通之御事ニ候付則四人同道柳原の參 殿尙形行原口上之趣奉伺候處今日拙者承知之通相違無之候付大略之御々條書頂戴退出

一 飛鳥井家の井上參殿  
一 國分上総原の御遣ニ治定之事

松平出羽守様

右去ル五日御國元御發駕十六日御着坂

松平阿波守様御嫡子

松平淡路守様

右昨十三日御國元御乗船今日御着

安藝守様御嫡子

松平紀伊守様

右去ル十一日御國元御乗船不日御着之由

但御引返之説有之候

右之通云々

十月十四日

木場傳内

慶喜參内天類ヲ拜  
シ物ヲ賜フ

一十六日德中參内

於御門外下輿車寄ハ昇降麝香間參入殿上人陪膳惣ニ如大樹於  
小御所 御對面賜 天盃并於

御前物賜之殿上人陪膳臨時廣橋(風傳)ハ被示昵近之人々五六輩車寄迄出迎  
已下惣ニ如大樹

右之通ニ亦何も 御沙汰等モ無之速ニ退出之由

參 内之儀ハ何方ハ何様申立候ニも御採用不被爲在斷然以

叡慮 被命候段十五日兩役被爲 召御沙汰相成候由

一十六日備前花房(虎太郎)入來同日藝船(伴之助)越入來

一廿日越藩下村尙入來

一同日尾藩八木銀次郎入來

土州

中山左衛士

佐々木三四郎

毛利恭助

上京

島村祐四郎

佐井寅二郎

藤本惇七

右容堂公ハ御内命ヲ奉し九州ニ爲探索被差出大ニ論ヲ變シ上京等

ニ相成候由大山格之助ハ申來

一八月廿一日原 宮ハ參殿云々之事

一葉室右衛門督様十月廿一日議奏被 仰出候事

一十月廿六日帶刀殿西郷等京着

一同廿七日 中將公(久光公)御所勞ニ亦御上京御斷 朝暮ハ被差出候事

小松西郷上京

一同廿七日、二條公御參被爲在候事  
一同夜

見親王ノ國事掛ヲ  
罷メ蟄居ヲ命ズ

常陸宮

此度國事掛依所勞理乍申上他出剩止宿且從來不行跡旁以蟄居被 仰  
出候事

國事掛被止候事

左大辨宰相

大原前

中御門大原卿等ニ  
閉門ヲ命ズ

兼而門流ヨリ相達候儀も有之候處去八月三十日其身爲官柄若輩を誘  
引結黨及建言候段不憚 朝憲不敬之至依之閉門被 仰付候

中卿  
岩倉下御邸

藤木右京

正親町三條

勤役中兼而左大辨宰相以下徒黨建言之次第乍令承知不加制止却而同  
意不心得之至遠慮閉門被 仰出候事

北小路左京

兼而門流が相達候義も有之候處去八月晦日徒黨及建言候段不憚  
朝憲不敬之至差控被 仰出候事

諸公卿ノ警衛兵ヲ  
命ズ

一正親町三條様大原様守衛別手組被申付中御門様岩倉入道殿別手組北小  
路殿高野殿穗波殿高倉殿愛宕殿櫛笥殿見廻リ組植松殿園池殿高辻殿千  
種殿岩倉殿加藤能登守殿四條殿西洞院殿西四辻殿小笠原左衛門佐殿右  
守衛人數被差出候事

來廿一日大原野祭上卿柳原様

來十五日吉田某 御同人

右御參向之事

紀州侯ニ浪士取締  
ヲ命ズ

紀伊中納言

十津川郷中浪士體之者立入候歟之風聞專有之候付近領之事故篤与取調  
鎮撫之儀盡力可有之被 仰出候事

右紀州殿ニ被達候事

本多能登守様御出府今日御出立

二條攝政ヨリ勤仕  
心得ヲ達ス

攝政殿方議傳ニ勤仕心得被 仰出候廉書寫

近來國家多事何となく人心不穩候ニ付

先朝毎々御配慮被爲遊候處不存寄 登遐恐入候事ニ候付而夫

新帝御幼君ニ被爲渡候得々上下一和專ラ補弼之力を可竭之秋ニ候愈公

義汝存し私情を去り嚴然たる大典を守り綱紀を張て國家を維持し萬民

昇平之德澤ニ浴し候様厚申談可勤仕候事

一國事御用掛リ一同無隔意申談精勤可有之事

但國事御用猥リニ不可口外事

一官家之向建言之義ハ總ニ兩役之中へ可差出候事

但何ニ不寄建言候ハ、參考之爲ニ候條厚心ヲ用至當明亮之理ヲ專要

ニ可申上我意主張之處置有之間敷事

一武家建白之義々惣ニ經其筋武傳へ可申出候事

一武傳方兼而達し置候通親族ハ格別其他之諸藩士ニ猥リニ面會不可有之

候事

一 御爲筋申立確證有之情實辨明之義ハ格別其餘姓名不慥或藩与唱へ浮説造言狐疑ニ類シ候義エ不可採用候兼被 仰出候通名前屹度可被正候事

一 正議御決定之後異論申立間敷事

一 外夷之儀ハ兼被 仰出も有之候得共 御國威屹度相立候様との 思

召右邊心得違不可有之事

一 爲國家厚ク心ヲ用十分ニ議論ヲ可加事

(慶應三年)  
卯正月

五藩 御名前

細川  
肥前  
久留米

五藩ニ命ジ三條卿等ヲ京都ニ護送セシム

筑前

兼被御預被差置候三條實美始此度願之趣も有之候ニ付御引取可相成候間得其意右之趣其方共ハ相達候様可被致候尤途中警衛人數差添穩便ニ相送候様可被致候

但

附屬之者共々大坂着之節同所御目付へ相届可得差圖旨附屬之者共へ可被相達候

九條尙忠卿ノ謹慎ヲ解キ入京ヲ許ス

九條 圓心

一 是迄不束之次第ニ付重慎被 仰付有之候處追々老年及古稀候間以格別之御憐愍今度重慎入洛被免候旨攝政殿被令候事  
但

參 内并外出他人面會等洛外之事月ニ一度計歸宅不苦一度之外不相成候事

四卷 (慶應三年正月)

織仁親王以下ノ參  
内ヲ尤ス

中務卿宮

正親町大納言

石山少將

平松甲斐權介

五條少納言

五辻大夫

右是迄思召有之被止參 朝他人面會置屹度可被及 御沙汰之處此度  
御凶事以格別之御憐愍出仕被 仰下候後々堅固改心可有之攝政殿被  
命候事

廣幡權大納言

德大寺中納言

長谷三位

是迄 思食有之自分遠慮被止他人面會置候屹度可被及 御沙汰之處

廣幡卿等ノ遠慮差  
控ヲ解除ス

就此度御凶事以格別之 御憐愍出仕被 仰下候後々堅固改心可有之  
旨攝政殿被命候事

東園中將

万里小路辨

是迄、、、被免差控、、、

石山右兵衛佐

是迄 思食有之被止參 朝他人面會置屹度可爲 御沙汰之處就此度  
御凶事以格別御憐愍出仕被 仰下候後々堅固改心可有之候自今本番  
所參勤可申攝政殿被命候事

正月十五日

織仁親王以下ノ參  
朝ヲ尤ス

有栖川帥宮様

中山前大納言様

右是迄 思召有之被止參 朝他人面會置屹度可被及 御沙汰之處就



此度御凶事以格別之 御憐愍出仕被 仰下候後々堅固改心可有之候

橋本(實左)中納言様

勸修寺(新選)前辨様

右是迄、、、、、、、改心可有之候自今本番所參勤之事

豐岡(實左)大藏卿様

正親町(公實)少將様

烏丸(光德)侍從様

右是迄 思食有之差控被 仰付置屹度、、、、、、、被免差控後

々前文同

滋野井(實左)中納言様

右是迄 思召有之差控被 仰付置屹度、、、、、、、被免差控後々

堅固改心可有之候

右攝政殿被命候事

豐岡隨資卿等ノ差  
控ヲ解ク

正月廿五日

慶喜ノ兵庫開港勅  
許ノ奏請書

一 昨丑十月中條約 勅許之節兵庫之被止候旨 御沙汰之趣早速外國人

ハ可申渡之處左候ハ忽瓦解ニ及折角平穩之御趣意も水泡ト可相歸且

一旦取結候定約相變候ハ、只々外國ハ信を失ヒ候而已ニハ所詮可被行

儀ニ無之其段深心配仕候得共一時切迫之情態御詳察之上條約

勅許被爲在候儀尙又彼是申上候モ斟酌可仕筋付先其儘御請申上置篤ト

熟考可仕奉存候折柄長防之事件差起引續故大樹之大故ニ及遂ニ開港期

限差迫リ各國より毎々申立候條約も有之就右尙又再應熟慮勘辨相盡候

處條約變更之儀強ニ施行仕候之必定義理曲直之論ニ及大ニ不都合相生

百萬生靈徒ニ塗炭ニ苦シミ

皇國之御浮沈ニも相拘候様可成行矣目前ニ有之右様之形勢至候上無據

條約履行候之實ハ御國體御威信共総ニ不相立於職掌最不相濟次第殊

堅艦利器彼所長ヲ取

皇國富强ヲ謀るゝ今日之急務候間何れも開港可仕至當之義ニ有之候然ニ今更彼是申行候是迄富强之術も一時盡果可申且條約之儀各  
國交際之基本ニ永久不易之規則無之候得々遂ニ強ハ弱ヲ凌弱ハ強ニ  
被制候様可相成西洋諸國大小強弱御坐候得共全ク信義を重し條約致  
遵守候付凌奪併吞之患も無之夫々立國罷在候事ニ條約之守否國之  
存亡ニ相拘候儀ニ御坐候得々旁々以一旦取結候條約ハ是非遂行不申候  
ハ難相行奉存候就ハ被爲於 朝廷候も右之事體篤与御勘考被爲  
在候様仕度自然利害得失如何与被思食候儀も御坐候ハ、參 内之上巨  
細言上可仕奉存候將亦宇内形勢變遷之儀追々申上候通ニ御坐候處古今  
之情態尙篤与考究仕候得ハ萬國森列土地風俗之異同ハ有之候得共均し  
く天地之化育ヲ受今日其生ヲ遂ケ其死ヲ完ニ致候ニ於ハ素より彼是  
之別無之既ニ民生同胞ニ候上ハ從テ信義を通候々天地之正理ニ候處

皇國環海之御國柄を以テ坤輿中東西要衝之地ニ當リ即今海外諸州逐日  
相開萬里比隣自在奔走之砌獨舊轍を墨守万國普通之交接不致候ハ自  
然之大勢ニ相戻リ不容易禍害頓ニ可相生奉存候因ハ形勢之變局方今  
之機會ニ候間四海兄弟一視同仁古訓ニ御基被遊天下ト共ニ御更始被爲  
在候様仕度左候得々是迄之陋習一洗數年を不出富强充實  
皇國之御武威彌増興張奉安  
朝意候様盡力可仕奉存候此段奏聞仕候以上

三月

慶喜

兵庫開港ニ關スル  
朝廷御沙汰書

兵庫開港之儀一昨年被止御請之處今度申立之次第不容易重大之事件ニ  
付被爲對  
先朝候ハ難被及 御沙汰筋ニ付尙早々諸藩見込をも可被聞食候間於  
大樹茂篤与再考可有之事

三月十九日

右 朝廷ヨリ 御沙汰幕へ御達之事

久光公ヲシテ上京  
意見ヲ言上セシム

島津大隅守殿

今度開港之儀別番之趣從 大樹建言仕候然處一昨年十月三港 勅許之  
筋於彼地之被止候 御沙汰之次第も有之不容易重大之儀ニ付猶早々上  
京見込之趣無腹臆言上可有之事

但

所勞等ニハ彼是隙取候ハ、見込之趣先以書取來四月中可有言上事

慶喜再ビ兵庫開港  
勅許ヲ奏請ス

一 兵庫開港條約履行之儀ニ付過日見込之趣建言仕候處右ハ重大之事件被  
對

先朝候ニ難被及 御沙汰筋ニ付尙早々諸藩見込をも被 聞食候間篤

与再考可仕旨 御沙汰之趣奉畏候慶喜儀年來闕下ニ罷在

先朝以來御趣意之程親敷相伺居殊ニ一昨年之 御沙汰及御坐候上之開  
港等輒ク建言可仕筋ニ無之候處

皇國之御爲利害得失勘考相盡候得ハ何れニも過日建言仕候通り之儀ニ  
無御坐候ニ永久御國體難相立輕重大小再三斟酌仕申上候次第ニ此  
上外ニ勘辨可仕様無御坐候且一旦取結候條約變更之儀ハ所詮難相叶勢  
ニ御坐候付各國ハ申立候儀有之節之過日建言之趣意を以夫々申達置候  
事ニ御坐候尤打續國事多端之折与ハ乍申重大之事件ニ付聊も不打捨何  
と取計不申候ハ不相濟儀ニ御坐候處是迄遷延仕居今更彼是申上候  
段對

朝廷深ク恐縮之至奉存候就ハ前件之次第國家御安危之界ニ付幾重ニ  
も一身ニ引受御斷可申上奉存候右之事情篤与御承知被爲在尙今一應被  
盡朝議候様仕度此段御尋ニ付重々 奏聞仕候以上

三月廿二日

慶喜

將軍下坂外國公使  
延見ノ件

御内々 大樹代替ニ付各國公使面會先達ニ言上濟ニ付此節各國に相達候處啖咭喇國兼々申立度事件有之由ニ攝海致渡來無程各國公使參着ニ可相成候間不日大樹下坂有之可被遂面會ト奉存候尤モ兵庫開港條約履行之儀ニ付テ此程見込ニ趣被申上置候通ニ今般下坂ニ趣意々其筋ニ談判ニ被在之候爲ニハ無之全前件代替面會ニ廉ニ被在之候付此段も御承知相成候様被致度被存候尤下坂時日之儀ハ猶申立可有之由ニ候事

三月十八日

勅シテ後命アル迄  
兵庫開港ヲ許サ  
ラシム

一過日再考建言文中且一旦取結候條約變更ニ儀ハ所詮難相叶時勢ニ御坐候付各國より申立候儀有之候節ハ過日建言ニ趣意ヲ以夫々申達置候事

ニ御坐候云々之文面如何ニ候何分

御沙汰有之候迄必ス開港差許候儀有之間敷其段心得可有之旨攝政殿被命候事

尤請書差出可有之事

右三月廿九日所司代に達シ早々可達 大樹武傳より申渡候事

一過日再考云々其段心得ニ有之候趣承知仕候右々追々申上候通條約變更ニ見据無之候間各國に趣意相尋候節々其段相答候迄ニ御差許無之内布告等仕候儀ニハ會テ無御坐候此段御請申上候

御書取ニ趣大樹公に入覽候處別番通被申聞候間此段貴答候云々

四月朔日

小笠原  
稻葉(正秀)

飛鳥井  
野々宮

御召之諸藩

尾張前大納言	紀伊
加賀	仙臺
筑前	藤堂
備前	阿波
雲州	久留米
米澤	秋田
對州	南部
二本松	越前大藏大輔

肥後	藝州
肥前閑叟	因幡
土佐容堂	宇和島伊豫守
津輕	柳川

合 御國迄二十五藩

野宮廣橋卿等辭職

一三月十九日山階宮正親町三條様幽閉被免  
 一四月十七日 滋野井 正親町 (兼尾) 鷺尾  
 右三人攝政殿に被迫野々宮廣橋久世六條議奏傳奏被辭職土宇御國  
 の異人警衛被命  
 一同十九日 大樹公 攝政殿に參殿徹夜ニテ四卿御處置振御輕卒与申趣  
 ヲ以被相迫終ニ御斷リ相成候事

柳原卿等辭職尋テ復職

一同廿日 攝政殿辭表被差出柳原辭職 近衛家一條九條國事掛被免候  
一廿二日柳原復職近衛一條九條家國事掛被命

一 議奏

廣橋大納言樣

六條中納言樣

久世前宰相中將樣

一 傳奏

野々宮中納言樣

右各依之御所勞御願之通被免候今十七日飛鳥井家月番候事

四月十七日

一 傳奏被 仰出

日野大納言樣

一 輕卒之儀有之議奏被免

滋野井卿等差控ヲ命ゼラル

一

柳原大納言樣

滋野井中將樣

正親町少將樣

滋野井侍從樣

鷲尾侍從樣

右差控被 仰付守衛人數被付置候事

四月十九日

一

內大臣

一條家左大將

九條大納言

右國事掛被 免候事

右被 仰出候仍之申入候也

四卷 (慶應三年四月)

四月廿日

日野大納言殿

胤房議奏加勢池尻宮内卿也

一柳原大納言

右議奏御再役被 仰出

近衛様

一條様

九條様

右國事掛被 仰出

右昨日被 仰出

卯四月廿三日

胤房

久光公孝明天皇山陵ニ詣テ

一四月十九日

四時泉涌寺坊中法安寺へ被爲入御裝束御召替ニテ

孝明天皇山陵并 御位牌殿に 御拜禮御半袴御召替宇和島侯越前侯に

御見舞ニテ御歸殿

同廿八日

天氣爲 御伺飛鳥井中納言様に御出日野大納言様二條様にも御出御歸殿

殿

一五月二日

容堂公に御見舞櫻木御殿 (近衛様) 山階宮陽明家に御參殿夜五ツ時御歸殿

一同四日

越公の御出宇和島侯容堂公も御出明後六日攝政家の御參殿  
朝廷人材御登庸之事件御建言之筋御決議  
但今日御供ニ御席へ伺候いゝし候

一 同六日

久光公等二條攝政  
ニ調シ人材登用ノ  
急ヲ建言ス

四侯御揃九ツ半時二條家の御參殿兵庫開港之儀蒙 御下問候得共何分  
朝廷議奏御一人様ニ御第一御人材御備無之候也見込言上仕候も無  
益と奉存候間根軸御居リ之處急務ト談合仕候間早々  
朝議被爲在度被 仰立御人體之儀左之通

傳奏

萬里小路

烏丸

議奏

中山  
正親町三條  
徳大寺  
中御門

攝政殿御返詞兎角御一同 朝議之上何分御答可被爲在与之御事ニ候由

一 同七日

利通等使者トシテ  
攝政邸ニ至ル

今日攝政殿に四藩分御使者

越藩

酒井十之丞

毛受鹿之助

土佐

福岡藤二

宇和島



西園寺雪江

御國

野生

拜謁奉願候得共御齒痛ニ不調強ニ奉願趣有之明日巳刻參 殿いたし候様承知引取候事

引取懸 一條家九條家ニ參 殿拜謁被 仰付四藩ノ攝政家ニ言上之趣云々ニ付御盡力被下候様奉願候

一 同八日

利通等ニ條卿ニ關ス

今日前條人數ニ攝政家ニ參 殿之處拜謁被 仰付非常之 朝議被成下候様詳細遂言上候事

今日 朝議不被爲在一同御揃之上ト申事ニ例之因循御評議ニ候由

一 今四藩申合近日中御登營之御沙汰有之候

一 同十日

久光公慶永宗城トニ條攝政ニ關シ建言スルトコロアリ

九ツ時越公宇和島公 中將公 攝政家ニ御參殿尙亦神速御評議被爲在候様御建言被爲在候 御歸殿越公宇和島公御邸ニ御出ニ候

土俟御所勞ニテ御斷神山左多衛御模様爲伺被參候越藩中根酒井參候(兼五)

登營ニ就テノ評議

御登營之御評議有之 朝廷ニ御建言被爲在候付御決議御伺迄之御登營不可然与之御論ニ候得共越公宇和島侯ハ一應 御登營 大樹公御趣意

御伺相成度之御論ニ越中根酒井土神山帶刀殿小生御前ニ伺候是非御

登營ハ御見合相成度中根酒井ト論し互ニ大論ニ相成候於彼方御趣意尙

御伺之上是迄

朝廷ニ對御行違之儀共御責被成度云々小子ハ最早御趣意御伺不相成候

共御失體ハ顯然ニ候間 御登營被爲在候得ハ大義ヲ以十分御論破可被

爲在儀故何分

朝廷之事ヲ必死ニ御盡シ御根軸ヲ被立候上ト申趣意ニ手強ク論し候

乍然尋常之談ニ候故合議ニ由リ兼容堂公御所勞ニ御斷之筋ニ相

決候

一 同十一日

人材登用ノ朝議ア

今日 朝議相成萬里小路烏丸御卑官等之譯ヲ以御採用ニ成兼候段鷹司前關白様類ニ御論相立候由大原様中御門ハ御遺詔ト申事ニ不攝政殿御論ニ不相止候由

一 同十二日

土邸に越宇御出 中將公も御出相成候明後十四日御登營被決候由明日御登營之儀御達有之候

一 同十三日

攝政家の四藩を御使越酒井土福岡宇西園寺小子同道御用人野間何某の取次

朝議之次第相伺候處云々御答之

一 同十四日

久光公等慶喜ニ謁シ國事ヲ議ス

中將公御登營越公宇和島侯容堂侯同様之

御供ニ不候

一 越公ハ御趣意御伺之處徳川家御相續以來之儀巨細御演達之由

一中將公ハ天下に信義ヲ被爲得候儀專要之旨被 仰上候處 大樹公天下ニ信義ヲ得候儀如何いふし可然哉

公云夫位之事ハ御賢明之御方様御方寸ニ可被爲在候付不申上 宇和島云何分防長御處置第一ニ候旨被 仰上候

容堂公云防長御處置ニ付不ハ小笠原御退相成候肝要之旨被 仰上 一大樹公ハ兵庫開港期期ニ差迫候義ヲ申立是非急ニ

勅許相成度二條殿かとモ大概御會得四藩も言上相成候得ハ御差許可相成候間致言上吳との事ヲ類ニ被申候由

中將公云兎角防長之御處置寛大ニ出先ツ是ヲ御施行相成度兵庫開港も實不容易是迄横濱同様之開港ニ不ハ不相濟云々

大樹公云横濱同様不相濟トハ如何之趣意ニ候や  
中將公云横濱不受

勅許幕府私ニ御開キ相成規則も不相立條理を失候故天下人心不服之譯  
ニ不候段御答

一字和島侯

勅許ト申儀不宜何也 朝命ヲ以御治定相成度云々

右之大略之御應答始ハ御辨解もまら〜出候得共跡ハ御詞も立兼候  
由

一十四日

長谷三位様議奏再役被 仰出候事

同十七日

土亭ニ

中將公御出越宇も御出被爲在明後十九日尙亦 御出防長御處置兵庫順

久光公等容堂ノ邸  
ニ會ス

序を以尙亦被仰立度御決議ニ不御登營之筋ニ御決之由

右不容易御大事故越宇御差とまり御論被立度兵庫開港之儀幕府同論  
之様相成候不々實ニ天下之笑談ト相成御盡力水泡ト相成事故防長之  
處ヲ第一ニ御論迎も御論逢兼候ハ、逢ハぬ形行ニ不御離を相成度論  
定之事

同十八日

朝帶刀殿越公ハ御出小子宇和島ハ出精々御論申上十分御とまり可相成  
御答ニ不候

一昨日正親町三條様議奏再役被 仰出候事

同十九日

御登營越宇同様之尙御建言被爲在候處約り防長事件兵庫開港一時朝廷  
ハ言上明日ニ不も一緒ニ攝政家ハ御出可被成御答候由

同廿日

久光公等登營

字和鳥侯御立尙明日御登營可相成御決議之由帶刀殿承候

同廿一日

御登營容堂公御不參越字ハ御出之御供也

今日之板倉閣老稻葉永井<sup>（前志）</sup>兩人御面會防長御處置段々御議論相成種々異論被相立候由候得共凡ハ御辨解被爲在終ニ寛大之御所置与申處ニ同論相成閣老ハ大樹公ハ言上左様ならハ防長御處置寛大之處ニ相決第一ニ防長御處置相運候上兵庫開港事件 朝廷ハ共々ニ及言上様可致与之御事之由之

同廿三日

今日大樹公就參 内四藩ハ參 内被爲在候様幕より御達相成候

一廿一日御登營之節防長御處置第一ニ相運候處ニ御論相成其通同意之事候得共何分 朝廷ハ幕ハ盡ク掌中ニ入之候事如何様欺罔之策相用候

將軍參朝四藩ニ參  
内ヲ命ズ

久光公等登營板倉  
閣老等ト會シ防長  
處分ヲ第一ニスベ  
キヲ述ブ

モ難圖候付先御不參ニ相延候方可然致評議昨廿二日字和鳥ハ帶刀殿越郎ハ小子御使相勤候得共越公ニハ既ニ御請相成殊ニ差懸之事ニハ今更無致方尙御勘考之上彼御方ヨリ御答可被爲在与之御事ニハ引取候然處今朝板倉ハ四藩ハ之書面御持參尙亦模様御伺之上若曖昧たる事候ハ、御參 内御止ニ御歸邸之御賦之由申來候今朝右書面艸稿持參帶刀殿同意字和鳥ハ參上少々文字御添削御請書願上越亭ハ持參中根ハ相渡候

慶永宗城參朝久光  
公不參

一越公御不參之處是非御參被爲在候様 攝政殿御沙汰ニハ原彌十郎爲御使參リ御參相成候由字和鳥公も同斷御參被爲在候 中將公ハ同様御使者御召相成候得共御不參之

幕ハ今朝御出御書面左之通

天下之大政ハ公明正大之至理を盡し時世的當内外寛急之辨を明よし御施行無御坐候ハ難相行勿論ニ御坐候全體不可救之今日ニ至候根

久光公等書ヲ幕府  
ニ呈シ防長處分兵  
庫開港ノ寛急先後  
ニ就テ建議ス